

# 井 尻 日 焼 田 遺 跡

— 一般県道書曲野田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2 0 1 1

大分県教育庁埋蔵文化財センター



SH16出土鏡片  
(内行花文鏡の破鏡 第38図)



SH02出土杓子形土器 (第6図1)



焼塩壺 (第49図20)

# 序 文

本書は、大分県教育委員会が県土木建築部玖珠土木事務所の依頼を受けて実施した、県道書曲野田線道路改良工事に伴う井尻日焼田遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する玖珠郡九重町は、大分県の西部に位置する豊かな自然に恵まれた地域です。この地域には縄文時代の二日市洞穴遺跡や室町時代に造られた瑞巖寺磨崖仏など、数多くの文化遺産が存在しています。

井尻日焼田遺跡の調査では、古墳時代前期の集落や戦国時代の屋敷跡などが発見されました。特に、後漢代の内向花文鏡（連弧文鏡）の破片は九重町の遺跡としては初めての出土であり、出土遺物を通じて地域の歴史を考える上で、重要な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御理解と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月 31 日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 山 口 博 文

# 例 言

- 1 本書は、一般県道書曲野田線道路改良工事に伴い大分県教育委員会が県玖珠土木事務所の依頼により実施した、大分県玖珠郡九重町大字書曲字井尻に所在する井尻日焼田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成16年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 整理作業は平成22年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターで実施し、報告書刊行に至った。
- 4 遺構の実測・写真撮影等は、調査員の綿貫俊一・谷 尊祥が行った。
- 5 遺跡の空中写真撮影は、九州航空株式会社が実施した。
- 6 遺物の実測・トレース、遺構図のトレースについては、その大半を株式会社九州文化財総合研究所に委託したほか、一部を編集者が担当した。
- 7 遺物の写真撮影については、河野真幸（大分県埋蔵文化財センター嘱託）が主に担当した。
- 8 本遺跡の出土遺物・実測図・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センターで保管している。
- 9 本書の編集・執筆は、綿貫俊一・吉田寛が担当した。

# 目 次

序 文

例 言 目 次

挿図目次 表 目 次 写真図版目次

## 第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過 ..... 1

第2節 調査組織の構成 ..... 1

## 第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境 ..... 2

第2節 歴史的環境 ..... 2

## 第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法 ..... 5

### 第2節 遺構と遺物

1 住居跡 ..... 5

2 土坑 ..... 34

3 溝 ..... 34

4 墓 ..... 35

5 柱穴出土遺物 ..... 39

6 遺構外の遺物 ..... 39

第4章 総 括 ..... 43

写真図版 ..... 51

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	井尻日焼田遺跡と周辺の遺跡……………3	第31図	SH13出土遺物①……………29
第2図	井尻日焼田遺跡上空写真……………6	第32図	SH13出土遺物②……………30
第3図	井尻日焼田遺跡遺構配置図……………7・8	第33図	住居跡SH14実測図……………31
第4図	住居跡SH01・SH02・ SH03・SH10実測図……………9	第34図	SH14出土遺物……………31
第5図	SH01出土遺物……………9	第35図	住居跡SH15実測図……………32
第6図	SH02出土遺物①……………10	第36図	SH15出土遺物……………32
第7図	SH02出土遺物②……………11	第37図	住居跡SH16実測図……………33
第8図	SH03出土遺物……………11	第38図	SH16出土遺物……………33
第9図	住居跡SH04実測図……………12	第39図	SK01出土遺物……………34
第10図	SH04出土遺物①……………13	第40図	SK02出土遺物……………34
第11図	SH04出土遺物②……………14	第41図	SD01出土遺物……………34
第12図	SH04出土遺物③……………15	第42図	1号墓実測図……………35
第13図	住居跡SH05実測図……………16	第43図	2号墓実測図……………35
第14図	SH05出土遺物……………17	第44図	1号墓・2号墓出土遺物……………35
第15図	住居跡SH06実測図……………18	第45図	1号墓出土銅銭①……………36
第16図	SH06出土遺物①……………18	第46図	1号墓出土銅銭②……………37
第17図	SH06出土遺物②……………19	第47図	1号墓出土銅銭③……………38
第18図	SH06出土遺物③……………20	第48図	柱穴出土遺物……………39
第19図	住居跡SH07実測図……………20	第49図	遺構外の遺物①……………40
第20図	SH07出土遺物……………21	第50図	遺構外の遺物②……………41
第21図	住居跡SH08実測図……………22	第51図	遺構外の遺物③……………42
第22図	SH08出土遺物実測図……………22	第52図	遺構の変遷……………44
第23図	住居跡SH09実測図……………23	第53図	井尻日焼田遺跡の石庖丁……………45
第24図	SH09出土遺物実測図①……………24	第54図	中津市大勢遺跡出土焼塩壺……………46
第25図	SH09出土遺物実測図②……………25		
第26図	SH09出土遺物実測図③……………26		
第27図	SH10出土遺物実測図……………26		
第28図	住居跡SH12実測図……………27		
第29図	SH12出土遺物実測図……………28		
第30図	住居跡SH13実測図……………28		

## 表 目 次

第1表	井尻日焼田遺跡1号墓 出土銅銭一覧表……………38	第4表	井尻日焼田遺跡出土遺物 一覧表(石器①)……………49
第2表	井尻日焼田遺跡出土遺物 一覧表(土器・陶磁器①)……………47	第5表	井尻日焼田遺跡出土遺物 一覧表(石器②)……………50
第3表	井尻日焼田遺跡出土遺物 一覧表(土器・陶磁器②)……………48	第6表	井尻日焼田遺跡出土遺物 一覧表(金属器)……………50

## 写真図版目次

写真図版 1	調査区全景 (垂直写真) ……………53	写真図版21	SH07出土遺物②……………73
写真図版 2	調査区全景 (上) 北より (下) 南より ……………54	写真図版22	SH08出土遺物・SH09出土遺物① ……74
写真図版 3	I 区全景 II 区全景 ……………55	写真図版23	SH09出土遺物②……………75
写真図版 4	住居跡SH01～03・10 住居跡SH04……………56	写真図版24	SH09出土遺物③……………76
写真図版 5	住居跡SH05・住居跡SH06 ……………57	写真図版25	SH09出土遺物④……………77
写真図版 6	住居跡SH08・住居跡SH09 ……………58	写真図版26	SH10出土遺物・SH12出土遺物 SH13出土遺物①……………78
写真図版 7	住居跡SH13・住居跡SH14 ……………59	写真図版27	SH13出土遺物②……………79
写真図版 8	住居跡SH15・土坑SK01 ……………60	写真図版28	SH13出土遺物③……………80
写真図版 9	住居跡SH16 住居跡SH16鏡片出土状況……………61	写真図版29	SH13出土遺物④……………81
写真図版10	1号墓・1号墓銅銭出土状況 2号墓 ……………62	写真図版30	SH14出土遺物……………82
写真図版11	SH01出土遺物・SH02出土遺物① ……63	写真図版31	SH15出土遺物……………83
写真図版12	SH02出土遺物②・SH03出土遺物 ……64	写真図版32	SH16出土遺物……………84
写真図版13	SH04出土遺物①……………65	写真図版33	SK01出土遺物・SK02出土遺物 ……85
写真図版14	SH04出土遺物②……………66	写真図版34	SD01出土遺物・1号墓出土遺物 2号墓出土遺物……………86
写真図版15	SH04出土遺物③……………67	写真図版35	柱穴出土遺物 ……………87
写真図版16	SH04出土遺物④……………68	写真図版36	遺構外の遺物① ……………88
写真図版17	SH05出土遺物①……………69	写真図版37	遺構外の遺物② ……………89
写真図版18	SH05出土遺物②……………70	写真図版38	遺構外の遺物③ ……………90
写真図版19	SH06出土遺物①……………71	写真図版39	遺構外の遺物④ ……………91
写真図版20	SH06出土遺物② SH07出土遺物①……………72	写真図版40	遺構外の遺物⑤ ……………92
		写真図版41	遺構外の遺物⑥ ……………93
		写真図版42	遺構外の遺物⑦ ……………94

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

「一般県道書曲野田線」は、大分県玖珠郡九重町書曲と玖珠郡玖珠町野田を結ぶ県道である。この県道は玖珠町森と九重町方面との玖珠盆地北周りのルートになっていたが、道路は狭小で離合困難地点が多い状況にあった。また近年、高速道路の開通に伴いアクセス道として交通量の増加から、道路整備の必要性が指摘されていたところである。こうした地理上の重要幹線であることから、玖珠土木事務所では平成16年(2004年)以前から道路改良を進めてきた。

大分県教育庁埋蔵文化財センターは年度毎の工事予定地に対し、関係部局と調整を図りつつ、確認調査・試掘調査・立会調査を行ってきた。調査地区周辺は、平成5年(1993年)版の『大分県遺跡地図』では「書曲遺跡」として周知されていたことから、遺跡が存在することが予想された。また、周知遺跡の範囲内で、平成15年(2003年)10月から平成16年(2004年)3月にかけて九重町教育委員会による発掘調査が行われており、古墳時代を中心とした遺構・遺物が出土していた。

大分県土木建築部建設政策課から、平成16年度に調査依頼が提出された(平成16年4月27日付け玖土第335号・平成16年5月10日付け建政第457号)。これを受けて確認調査を行った結果、調査区から遺構・遺物が発見され、協議の結果、保存が困難であることから発掘調査が必要となった。発掘調査は平成16年9月13日から平成17年(2005年)1月13日まで調査を行なった。発掘調査の終了後は、予定通り工事が実施された。なお、遺跡名は九重町教育委員会による発掘調査で「井尻日焼田遺跡」とされていたので、これを踏襲した。

## 第2節 調査組織の構成

発掘調査の体制は、以下の通りである。

事業主体 大分県玖珠土木事務所

調査主体 大分県教育庁埋蔵文化財センター

埋蔵文化財センター 所長

伊藤 正行

次長兼総務課長

益永 孝則

調査第一課長

高橋 徹

調査一課一般事業担当副主幹

綿貫 俊一

囑託

谷 尊祥



井尻日焼田遺跡の現状 (2011年2月撮影)

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

井尻日焼田遺跡は、大分県玖珠郡九重町大字書曲字井尻、通称「日焼田」に所在する（第1図）。

井尻日焼田遺跡の所在する場所は九重町北西部に位置し、玖珠町との境界地域にあたる。このあたりは九重町・玖珠町の中で最も開けた玖珠盆地に含まれている。玖珠盆地の周囲は大分県でも有数の山岳地帯となっているが、盆地の北部には耶馬日田英彦山国定公園に指定された山々、東部には青野山・大祖山、南部には万年山・飯田高原が位置している。この盆地周辺の山々は、頂部が平らな地形を持つメサ地形としてよく知られているところである。こうした山々の間を縫うように流れるのが、玖珠川である。玖珠川は周囲の山々からの水を集め、蛇行しながらも西流し、筑後川となって有明海に注ぐ。

井尻日焼田遺跡は盆地北部に広がる山地の一山稜の西側の扇状地・低位段丘に立地し、西側に北流する松木川、その西に玖珠川が北流する。また、遺跡が立地する扇状地・低位段丘は、山裾や松木川に沿うように南北に長い地形を示している。

### 第2節 歴史的環境

玖珠盆地は、日田盆地とともに、玖珠川・筑後川沿いにある小規模ながら平地を有する小世界を形成しているために遺跡が多い。

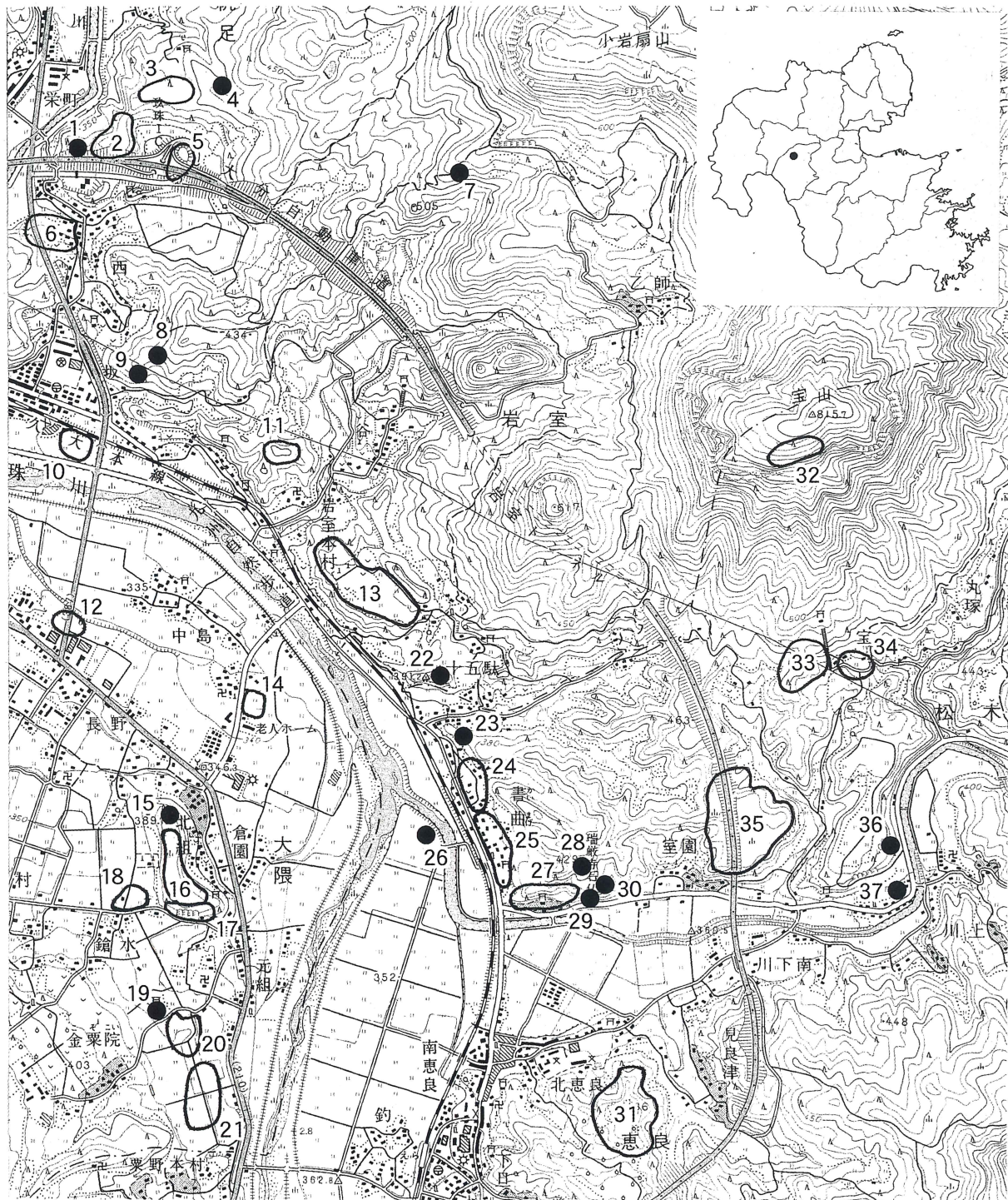
日出生台や四日市遺跡では、三万年前に遡る旧石器時代の石器が多数見つかっており、玖珠地域や小国方面の石を材料としていた。この頃は氷河期にあたり、人々は遊動生活をしながら狩猟採集していた時代であった。井尻日焼田遺跡に近い二日市洞穴遺跡<sup>(1)</sup>では、縄文時代早期から晩期までの遺構・遺物が見つまっているが、この時代は定住生活を基本としながら狩猟採集生活を行った時代であった。二日市洞穴遺跡は定住するには狭い空間であることから、キャンプ地であったとみられる。このほか釘野千軒遺跡<sup>(2)</sup>・都原遺跡・奥野遺跡など山裾や段丘上に遺跡が点在している。

弥生時代は水田農耕が本格的に開始・発達した時代であり、玖珠盆地周辺にもこの頃の遺跡が多い。旦の原遺跡は弥生時代前期から後期にいたる遺物がみられる拠点遺跡である。また、四日市遺跡では弥生時代中期の大集落が形成されており、住居跡や米・大豆・石戈・石庖丁などの遺構・遺物が多い。このほか弥生時代は小国家が成立した時代でもあるが、権威や戦闘に関わる遺物や遺跡も見つまっている。元畑遺跡からは中細型銅矛と呼ばれる武器形祭器が出土しており、境界防御の意味をもった埋納物と推定される。また、白岩遺跡<sup>(3)</sup>では山の中腹を取り囲む周溝が廻らされ、内部に飛礫（投弾）が貯蔵されていた。白岩遺跡は、立地から考えて狼煙台の機能をもった戦略的山塞と推定されている。

古墳時代は3世紀中頃には出現する前方後円墳に象徴される時代で、7世紀頃まで継続する。玖珠地域における大きな古墳としては亀都起古墳(前方後円墳)<sup>(4)</sup>・將軍塚古墳・瀬戸古墳<sup>(5)</sup>など、多数の首長墓が盆地各所に点在しているし、井尻日焼田遺跡の近くにも井尻古墳・弘川古墳が位置する。こうした首長墓の他にも小竿遺跡(石棺群)<sup>(6)</sup>・横穴墓などの家族墓なども多い。井尻日焼田遺跡の近くにも、二日市横穴墓群がある。また盆地内には古墳などの墓地だけではなく、古墳時代前期から後期までの集落遺跡も見つまっている。四日市遺跡では古墳時代前期初頭（3世紀中頃）、松木遺跡<sup>(7)</sup>・原田遺跡<sup>(8)</sup>では古墳時代後期（6世紀）の集落跡がある。

飛鳥時代は6世紀末(592年)～8世紀初頭(和銅3年・710年)の時代であるが、国内的には飛鳥寺や法隆寺若草伽藍が建立されている。一部古墳時代にかかるが、治別当遺跡<sup>(9)</sup>でこの段階に相当するカマドをもつ住居跡が見つまっている。おそらく古墳時代後期の6世紀代から連続して営まれた遺跡が多いのだろう。この時代は中央政権の地方統治体制が確立した頃で、福岡県大宰府跡蔵司西地区の調査で「久須評大伴マ」と墨書された木簡が出土している。このことから、「玖珠郡」の前身としての「久須評」が設置されていたことがわかる。





第1図 井尻日焼田遺跡と周辺の遺跡 (1/2,500)

- 1 瀬戸古墳 2 瀬戸遺跡 3 平田山土塁跡 4 鬼ヶ城古墳 5 帆足城跡 6 西遺跡 7 アタタメ火葬墓
- 8 般若寺1号墳 9 般若寺2号墳 10 坂口遺跡 11 岩室遺跡 12 六十六間遺跡 13 旦ノ原遺跡
- 14 塔ノ元遺跡 15 船岡山古墳 16 船岡山石棺群 17 船岡山横穴墓群 18 槍水遺跡 19 亀都起古墳
- 20 祇園遺跡 21 おごもり遺跡 22 五行塚遺跡 23 松山1号墳(弘川古墳) 24 井尻日焼田遺跡 25 書曲遺跡
- 26 松山2号墳(井尻古墳) 27 二日市横穴群 28 二日市古墳 29 瑞巖寺磨崖仏 30 二日市洞穴
- 31 恵良城(高城) 32 宝山遺跡 33 宝八幡宮境内遺跡 34 上ノ坊遺跡 35 松木遺跡 36 仏力岩遺跡
- 37 粟野遺跡群

奈良時代は8世紀を中心とした時代で、国内的には東大寺が建立された時代として知られる。この頃の玖珠郡に関しては、「久須評」に続く玖珠郡衙に倉が19棟もあったことが正倉院正税帳に記載されている。この頃の遺跡としては小田遺跡群<sup>(10)</sup>があり、多くの住居跡が見つただけでなく、円面硯が出土している。また、伝承では養老年間に宝八幡社が勧請されたという。

平安時代は8世紀末から12世紀末(794年～1185年)までで、下向した郡司の清原正高以降、清原一族によって玖珠郡の本格的な開発がはじまった頃と考えられる。この頃の玖珠盆地周辺の動向は詳らかではないが、恵良にあるお堂の菩薩像、滝上にある阿弥陀堂の阿弥陀三尊像、右田にある見留納骨堂の如来形像をはじめとした仏像類がかなり残存しているようであり、郡内における活動が窺える。

鎌倉時代・室町時代・安土桃山時代は12世紀末～16世紀末までの間で、玖珠郡内では上述した清原一族が荘園・在地領主化していた。この間、郡内各所に中世城館・石像物・寺院が建てられた。室町時代初期(南北朝時代)に築城された伐株山城跡<sup>(11)</sup>、16世紀末に毛利高政によって築城された角牟礼城跡<sup>(12)</sup>は著名である。井尻日焼田遺跡周辺でも恵良城跡<sup>(13)</sup>・松木城跡などがある。

江戸時代にいと幕藩体制のなか、玖珠郡内は森藩領・天領に分割される。この頃、村の組織などの統治体制が整備され、現在に続く地域社会の原型が成立した。

さて、井尻日焼田遺跡周辺は山裾や松木川に沿うように南北に長い地形を示すが、この地形は言い換えれば山裾と川に規制された回廊状地形ということになる。そのため、玖珠盆地の北辺の重要なルートであったとみえ、井尻日焼田遺跡周辺にも改変された地形、横穴、石造物が分布している。

註(1) 九重町教育委員会『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』(1980年)

(2) 九重町教育委員会『釘野千軒遺跡1』(1997年)

(3) 玖珠町教育委員会『白岩遺跡』(玖珠町文化財調査報告書 1993年)

大分県教育委員会『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡－九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』(1997年)

(4) 大分県前方後円墳研究会「大分県の前方向後円墳集成(Ⅰ)」(『おおいた考古Ⅰ 1988年)

(5) 大分県教育委員会『瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足遺跡－九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』(2000年)

(6) 玖珠町教育委員会『小竿遺跡－大分県玖珠郡玖珠町大字山田所在遺跡の調査－』(1985年)

(7) 大分県教育委員会『松木遺跡－九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』(1997年)

(8) 大分県教育委員会『堂園遺跡・原田遺跡・岩塚古墳・玖珠S A地区遺跡群・谷ノ瀬遺跡－九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』(1995年)

(9) 大分県教育委員会『治別当遺跡－九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』(1999年)

(10) 玖珠町教育委員会『小田遺跡群』(1987年)、同『小田遺跡群2』(1988年)

(11) 玖珠町教育委員会『伐株山城跡』(1984年)

(12) 玖珠町教育委員会『角牟礼城跡』(2000年)

(13) 九重町教育委員会『恵良城跡－宅地造成工事に伴う発掘調査概報－』(1993年)

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

井尻日焼田遺跡は、南北に長い山と北流する松木川に挟まれた扇状地・低地に立地するため、県道も地形に規制される形で南北方向に延びている（第2図）。調査地点は県道の拡幅を行う場所であり、したがって調査区も県道に沿う形で細長く設定した。また、東5mの至近距離には移転改築となった書曲公民館が位置しており、地域の集会以頻りに利用される状況があった。この公民館へアクセスする空間が必要であり、道として残す必要から、当該部分の調査を断念した。さらにその南側で、T字形に県道から東へ東折する里道も生活道として機能しているため調査対象外とした。

発掘調査では、T字形の三叉路東折部分より北側をI区、南側をII区として区分した（第3図）。I区はやや不規則ではあるが、道路沿いをC列、その東をA列、さらにその東をB列と呼称し、北から1・2・3・4・5と調査区番号を付けた。さらにA・B-1区の北側に拡張区として不規則ながらA'-2区・A'-1区・C-2区・C-1区と番号を付けた。II区も同様に、道路沿いをA列、その東をB列とし、北から1・2・3・4・5・6と調査区番号を付けた。これらの区画は、それぞれ南北10m・東西8mの広さを持つ長方形区画である。I区B列東側の南北軸は、2区でのA列とB列境の南北軸と同じである。また、I区4列・5列の境界にあたる東西軸とII区1列・2列の境界にあたる東西軸との距離は30mである。こうした調査区画の設定後、発掘作業時の安全を図るために、道路拡幅限界から50cm～100cm程度離れた調査区を設定した。発掘調査を実施した面積はI区約360㎡、II区約470㎡の合計約830㎡である。

現地での発掘調査は、諸準備の後、平成16年（2004年）9月13日に重機を使用して表土掘削を行い、引き続き遺構検出・包含層掘削・遺構掘削を行った。発掘調査は約5箇月間行い、平成17年（2005年）1月13日には、現地での作業をすべて終了した。

### 第2節 遺構と遺物

井尻日焼田遺跡で検出された遺構は、弥生時代から古墳時代・古代の所産である住居跡15基（SH01～SH16、ただしSH11は欠番）・土坑2基（SK01～SK02）、中世の所産である溝1条（SD01～SK02）、墓2基、柱穴多数である。

第2章第1節の「歴史的環境」で触れたように、弥生時代以降、著しく開墾・開発されてきたこともあるのか、下部のローム層を除きクロボク・アカホヤといった自然堆積層は一切残存していなかった。表土は10cm前後で、重機によって表土を除去すると、中世から弥生時代までの遺構面が現れた。

調査が進展するにつれ、遺構の流入土の上から新たなる遺構が繰り返し掘削されていたことが判明した。そのため、全容の分かる遺構はほとんどない有様で、例えば住居跡については、支柱穴がどれに帰属するのか判明しなかったものが多かった。住居跡の大半は直線的なラインを検出したものが多く、方形プランを基本としたものであると推定している。

以下、住居跡・土坑・溝・墓・柱穴の順で、遺構の種類ごとにその詳細を報告する。

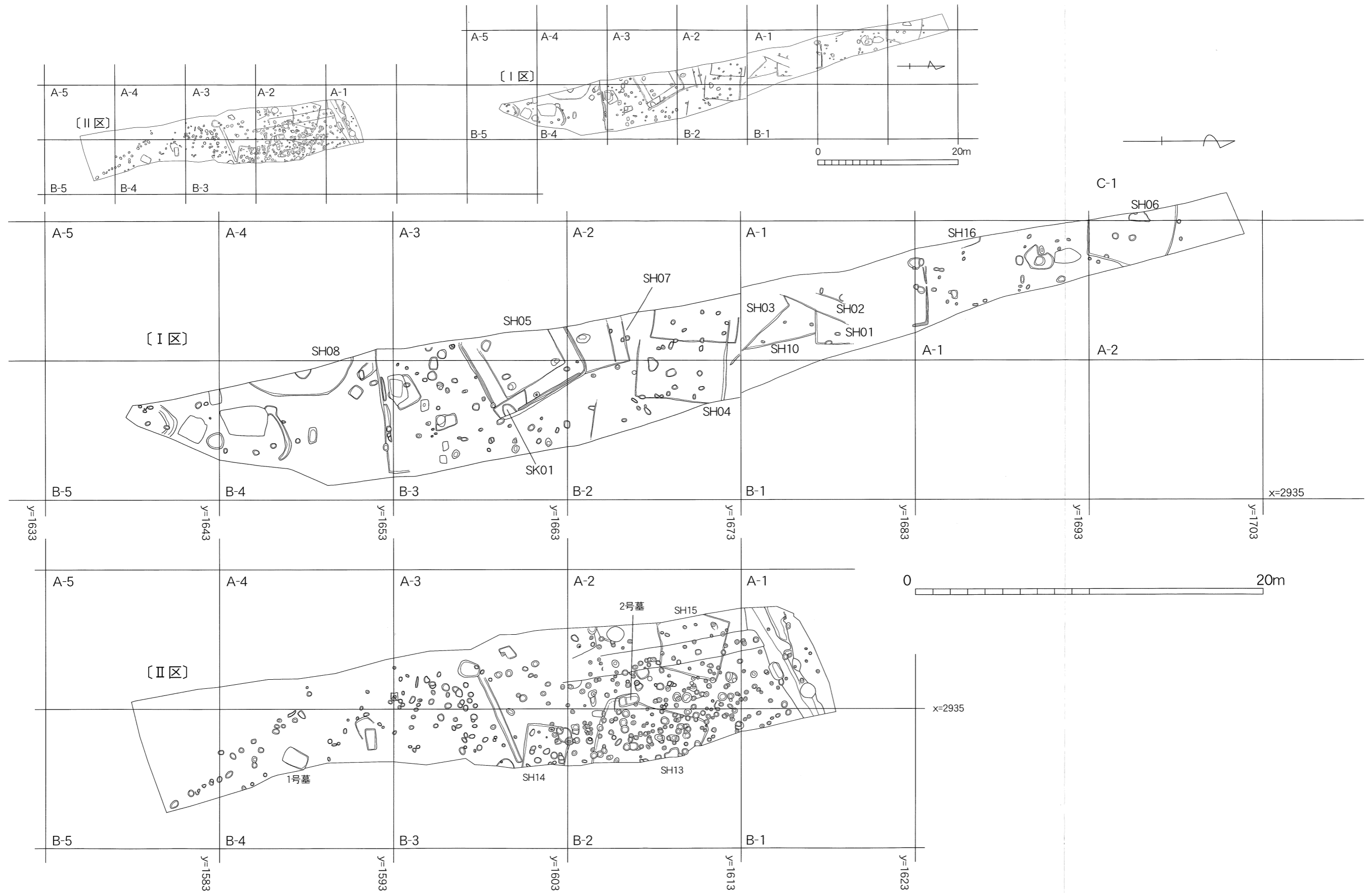
#### 1 住居跡

##### SH01（第4図）

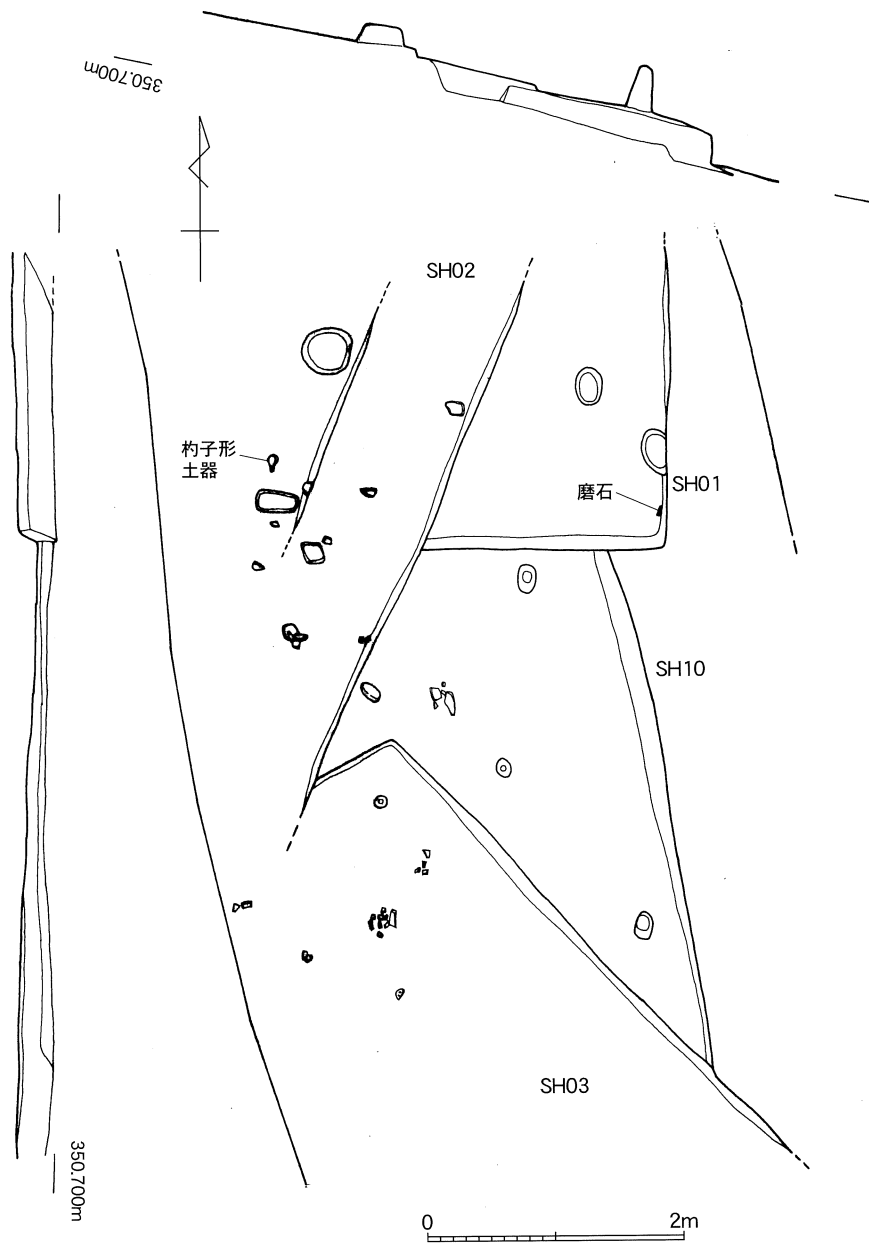
I区のA-1区に位置する。SH02に切られ、残存状態はよくない。遺構南東隅付近と思われるL字状の検出プランが確認されたことから、方形の住居跡と推定した。遺構の規模は現状で東西1.9m、南北2.3mを測る。壁の残存高は24cm。柱穴が存在するが、位置関係から支柱穴ではない。出土遺物は少ないが、埋土中から土器の小片と南東隅付近の壁際から、磨石が出土している。出土遺物と切り合い関係から、弥生時代後期以降の所産と推定される。



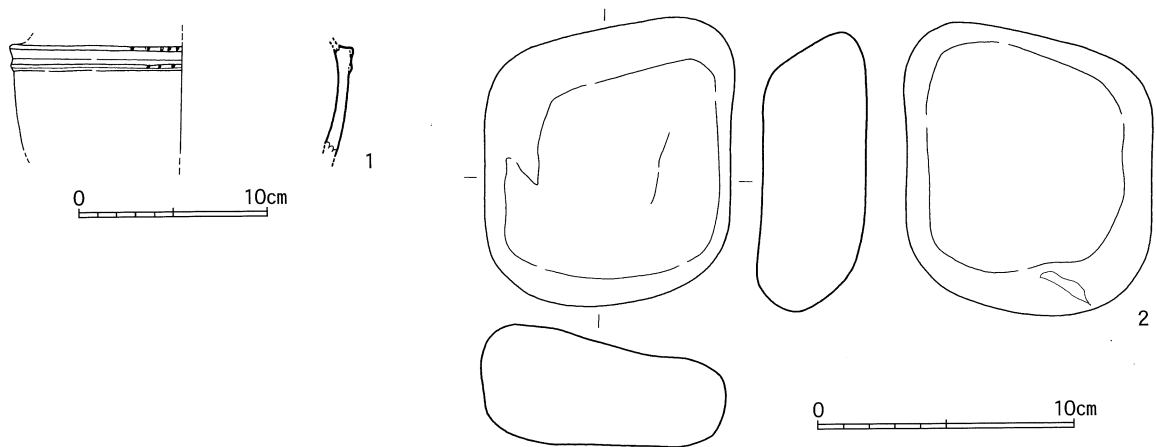
第2図 井尻日焼田遺跡周辺上空写真



第3図 井尻日焼田遺跡遺構配置図 (1/200, 1/500)



第4図 住居跡SH01・SH02・SH03・SH10実測図(1/60)



第5図 SH01出土遺物(1/4, 1/3)

### SH01出土遺物（第5図）

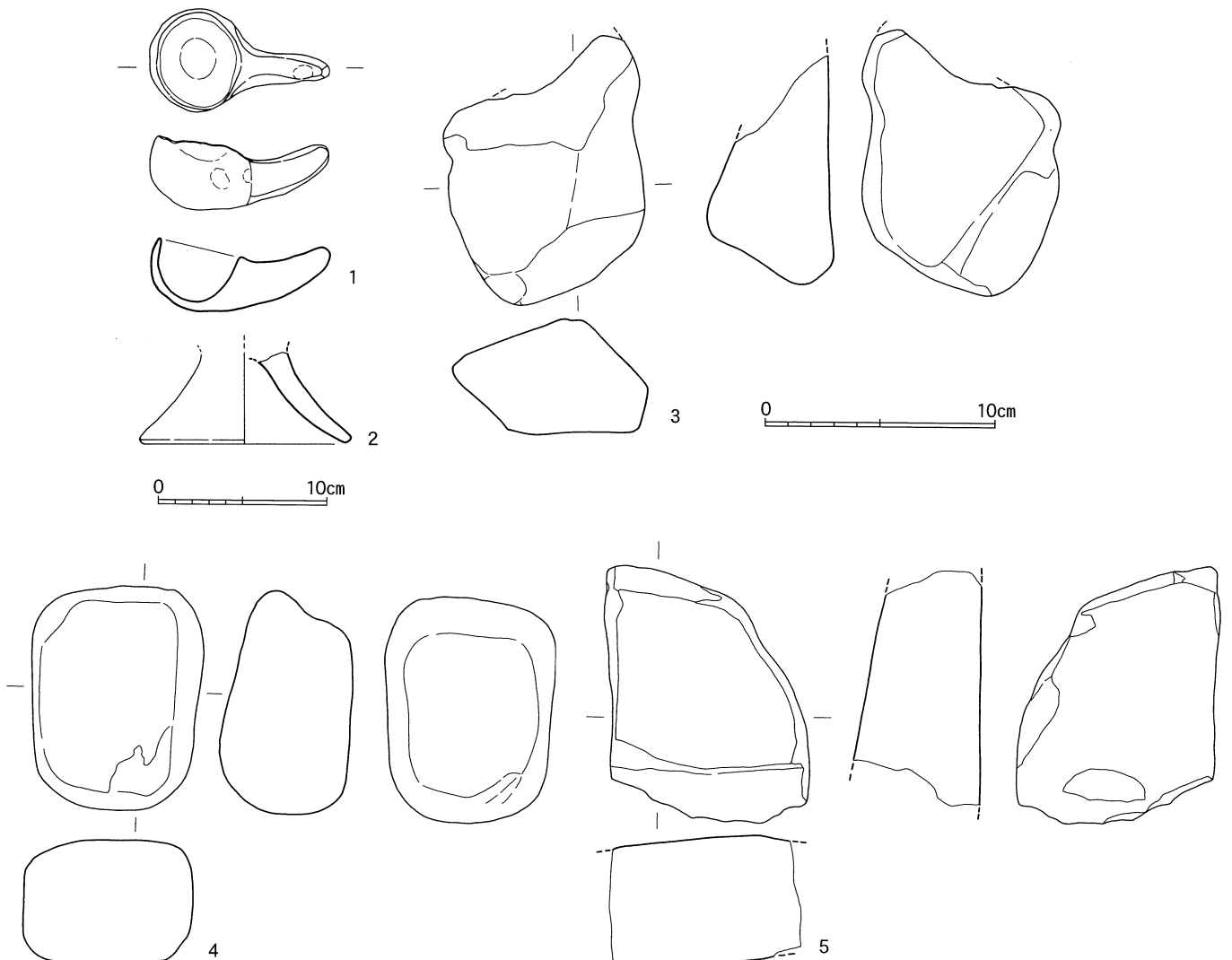
1は弥生土器壺の胴部で、外面に2条の刻目突帯を有する。弥生時代後期以降の所産である。2は磨石で、上面に使用痕が認められる。

### SH02（第4図）

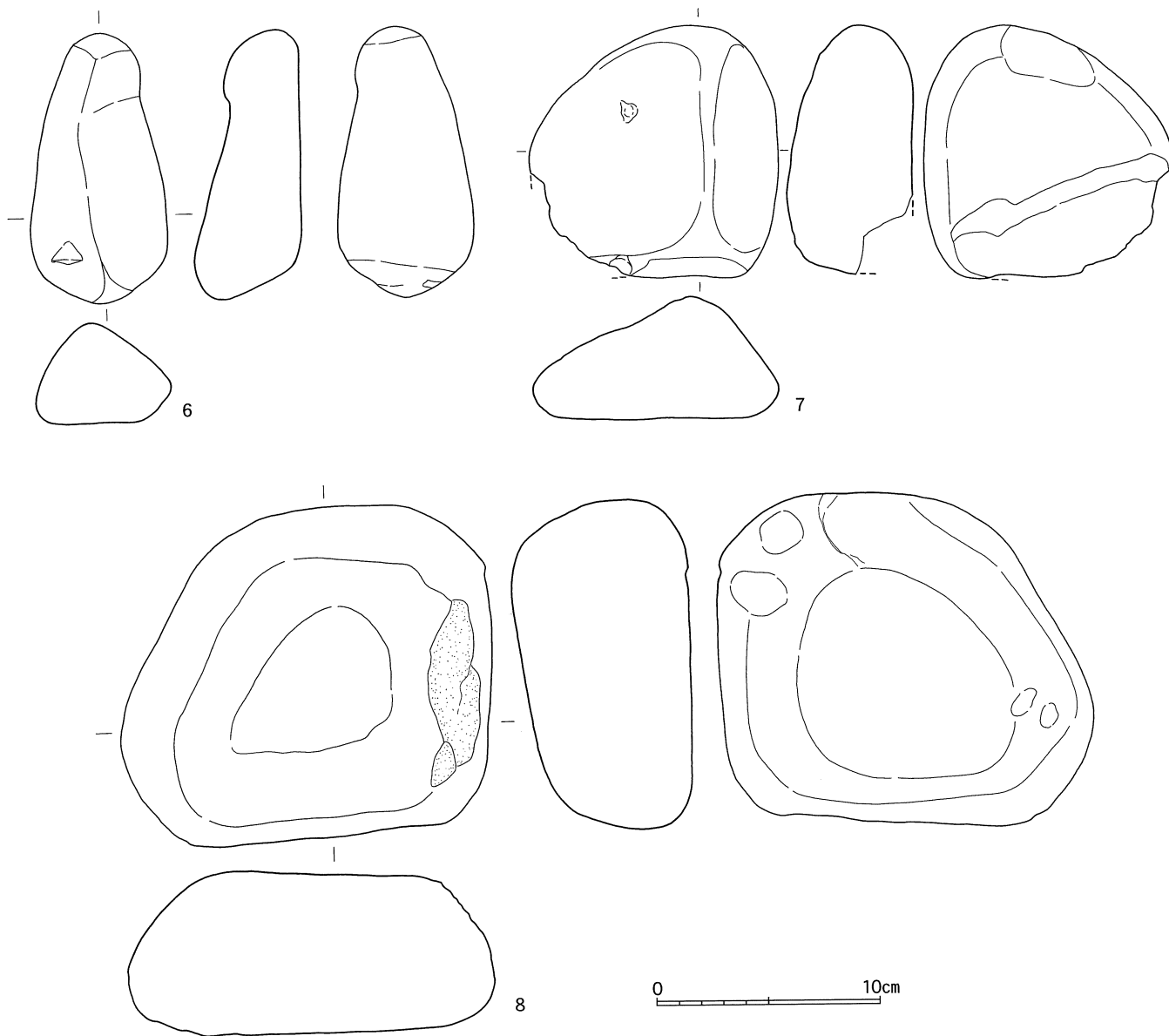
I区のA-1区に位置する。SH01を切り、残存状態はよくない。並行する二条のラインが見られるので、ベッド付きの方形住居跡と推定したが、遺構の北側と南側は残存していなかった。外側の壁の落差は3.5cmで、ベッド部分の落差は約8cmである。遺構の規模は不明であるが、残存する部分から少なくとも一辺が4.5m以上の規模を有していたと推定される。支柱穴等は不明である。埋土中から杓子形土器の完形品が出土しているが、残念ながら良好な相伴遺物などが無い。また、磨石・叩石も一定量出土している。出土遺物と切り合い関係から、古墳時代前期の所産と推定される。

### SH02出土遺物（第6・7図）

1は杓子形土器で、完形品である。内外面はナデによって仕上げられ、外面に指頭痕が認められる。また、口縁端部と口縁部外面付近に赤色顔料が塗布された痕跡が認められる。2は土師器の脚部で、胴部以上は欠損している。器種は不明である。1・2はいずれも古墳時代前期頃の所産と推定される。3～8は磨石・叩石・台石である。



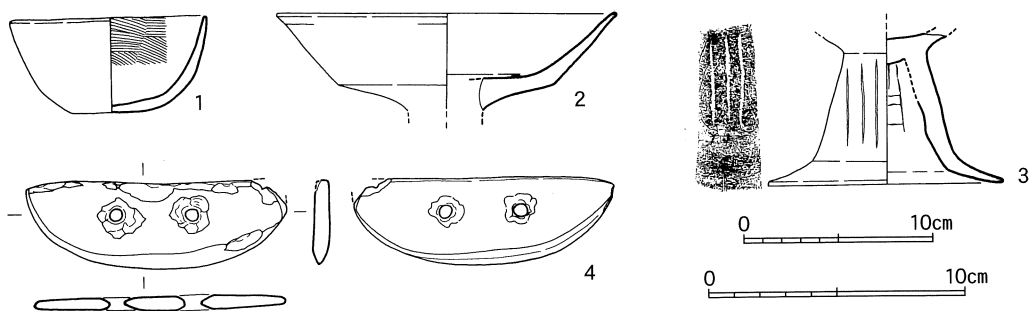
第6図 SH02出土遺物① (1/4, 1/3)



第7図 SH02出土遺物② (1/3)

SH03 (第4図)

I区のA-1区に位置する。遺構の前後関係はSH10を切り、SH02とSH04に切られる。残存状態が悪く、遺構の規模は不明であるが、一辺が4.5m以上の規模を有していたと推定される。壁の落差は3~4cmと僅かである。支柱穴等は検出されておらず、不明。出土遺物には土師器の埴と高坏などがあり、構築年代は古墳時代前期である。また、石庖丁の完形品が出土しているが、他の遺物の年代観と合わないため、混入品と考えられる。

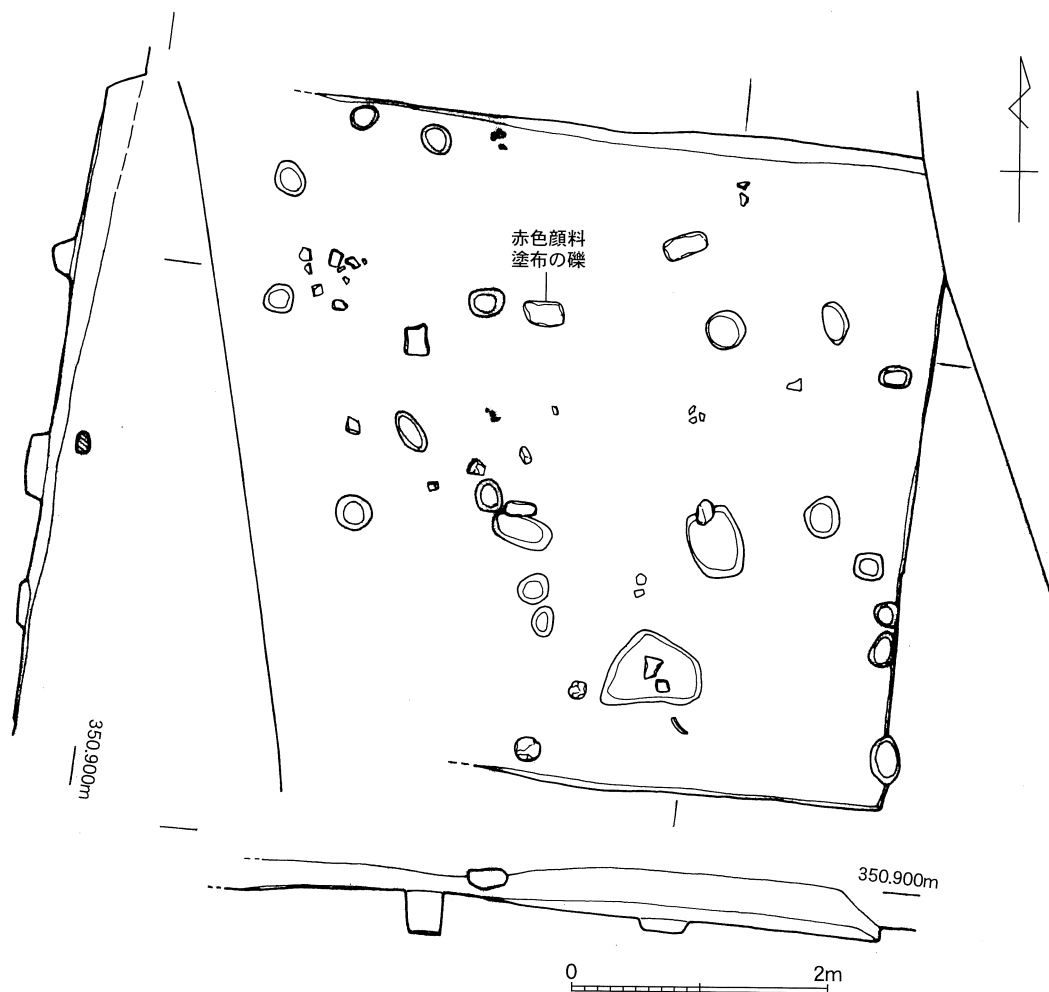


第8図 SH03出土遺物 (1/4, 1/3)



### SH03出土遺物（第8図）

1は土師器碗で、内面に刷毛目が施されている。底部は丸みを帯びた平底となる。2は高杯の杯部で、脚部以下を欠損する。3は高杯の脚部で、外面に沈線が3条認められ、意図的な文様である可能性が考えられる。2・3の高杯は古墳時代前期の所産であろう。4は石庖丁で、完形品であるが、混入品である。



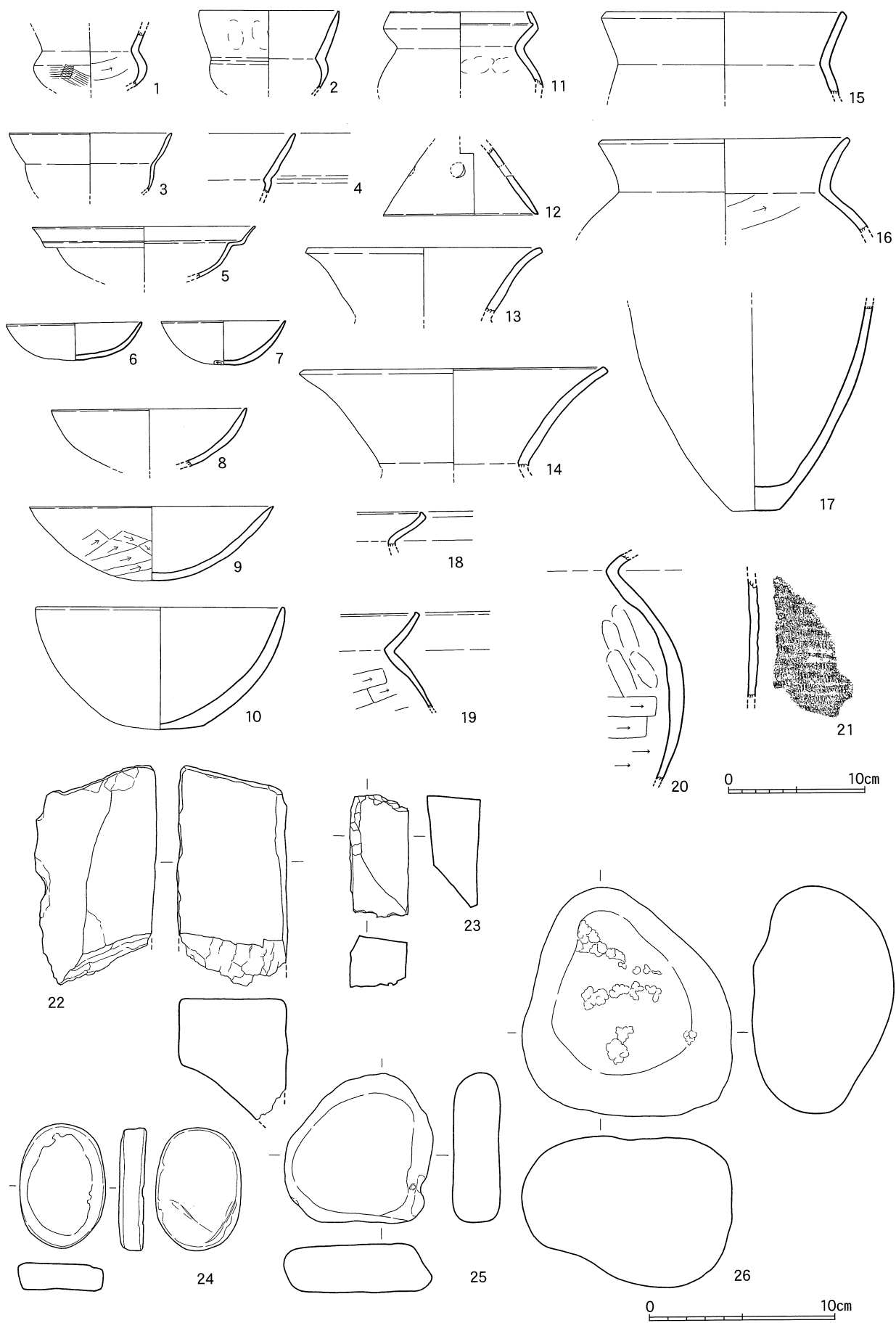
第9図 住居跡SH04実測図 (1/60)

### SH04（第9図）

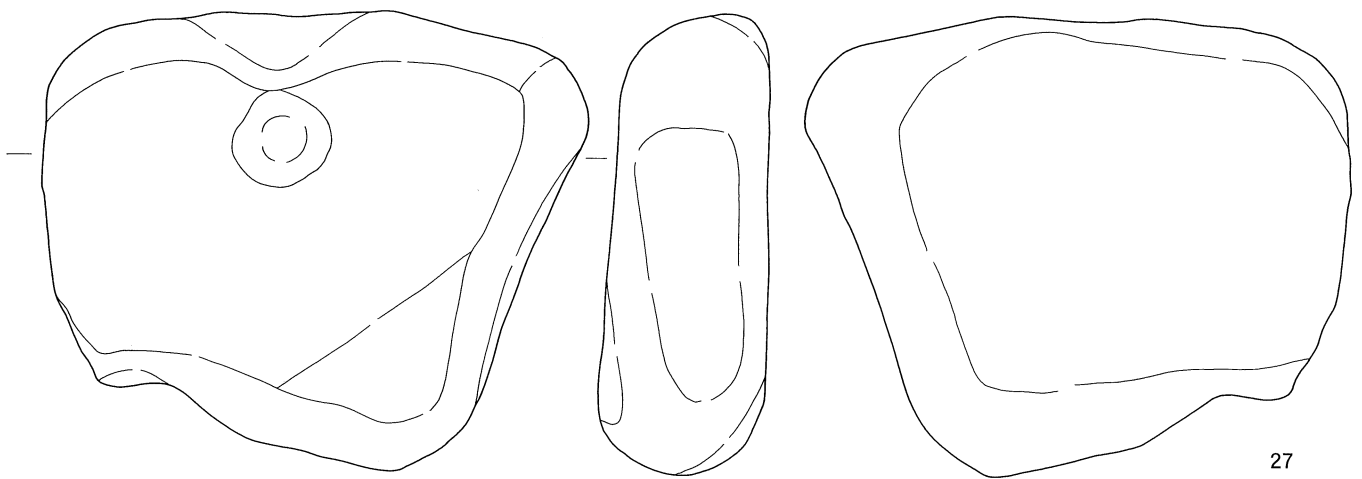
I区のA-2・B-2区に位置する。遺構の前後関係はSH01・SH02・SH10に切られ、残存状態はよくない。遺構の南辺ラインと東辺ラインの一部を検出し、その規模は東西5.3m以上、南北5.2mである。壁の落差は9cmを測る。残存する遺構ラインから方形の住居跡と推定されるが、支柱穴等は不明である。遺構北西側の埋土中から、大型の台石や叩石が出土しているが、この遺構に帰属するものかどうか不明である。このうちのひとつには、赤色顔料が付着していた。出土遺物から、古墳時代前期の所産と推定される。

### SH04出土遺物（第10～12図）

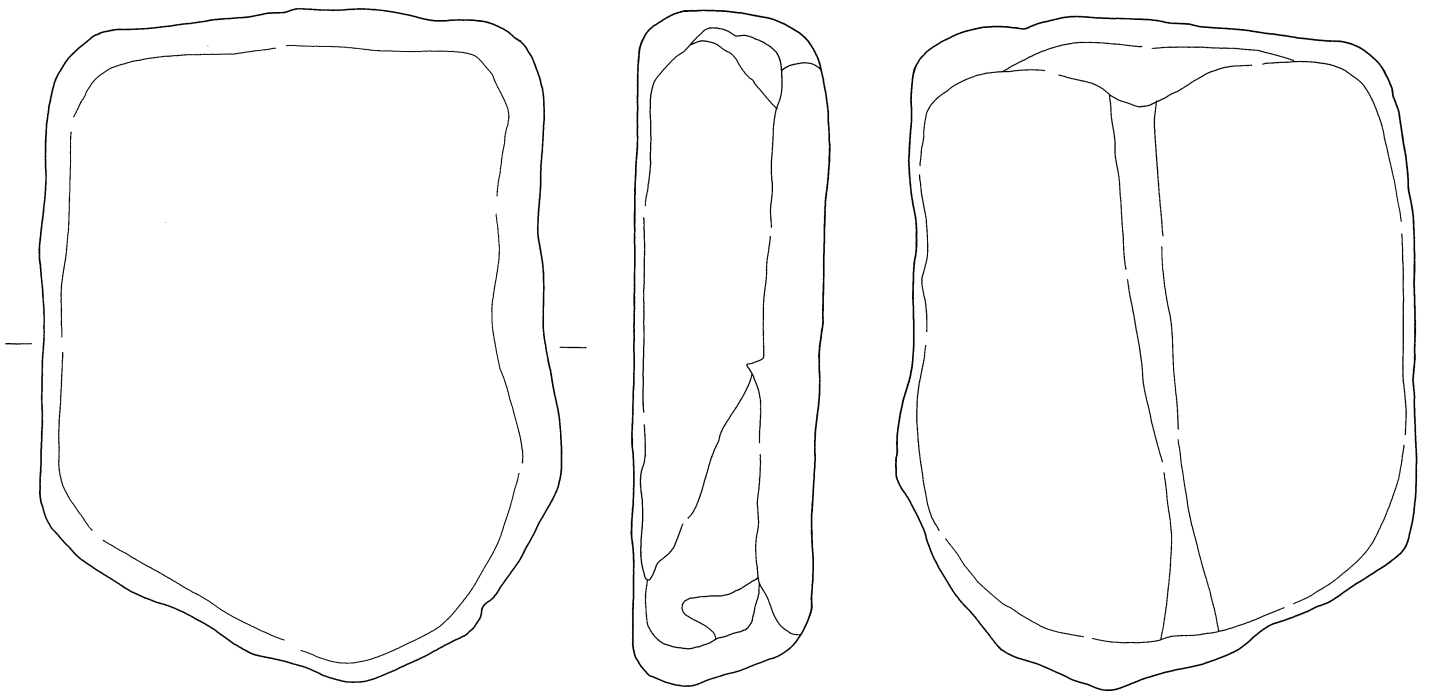
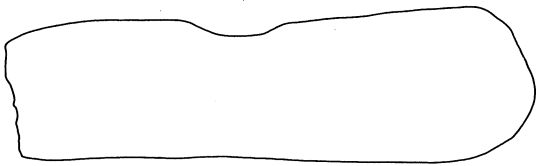
1～4は布留式系統の小型丸底壺（鉢）である。5は二重口縁を有する布留式系統の鉢で、器壁が極めて薄く、他地域からの搬入土器である可能性が考えられる。6～10は鉢で、小型のもの（6・7）と中～大型のもの（9・10）がある。11は逆「く」の字状に屈曲する二重口縁をもつ小型の壺で、外面にナデ、内面に指頭痕が認められる。12は布留式系統の小型器台の脚部で、円形の貫通孔が認められる。13・14は大きくラッパ状に開く口縁部を有する壺または甕である。15～17は甕で、15・16は口縁部、17は底部である。17の底部は平底が残存している。18・19は庄内式系統の土師器甕の口縁部で、端部を上方につまみ上げる形態を呈する。20は甕の胴部で、内面に



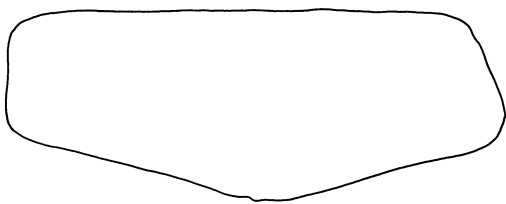
第10图 SH04出土遺物① (1/4, 1/3)



27

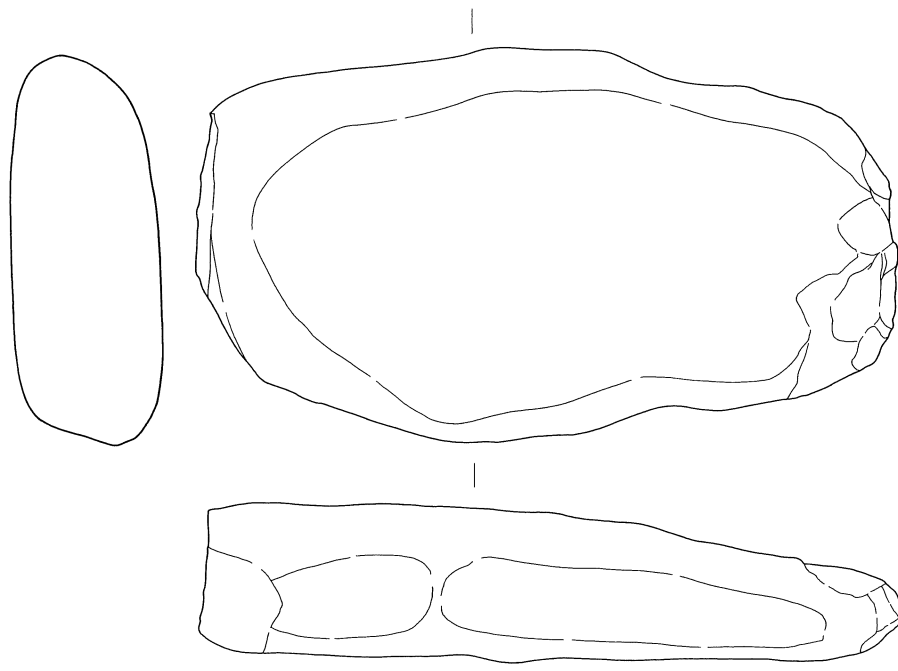


28

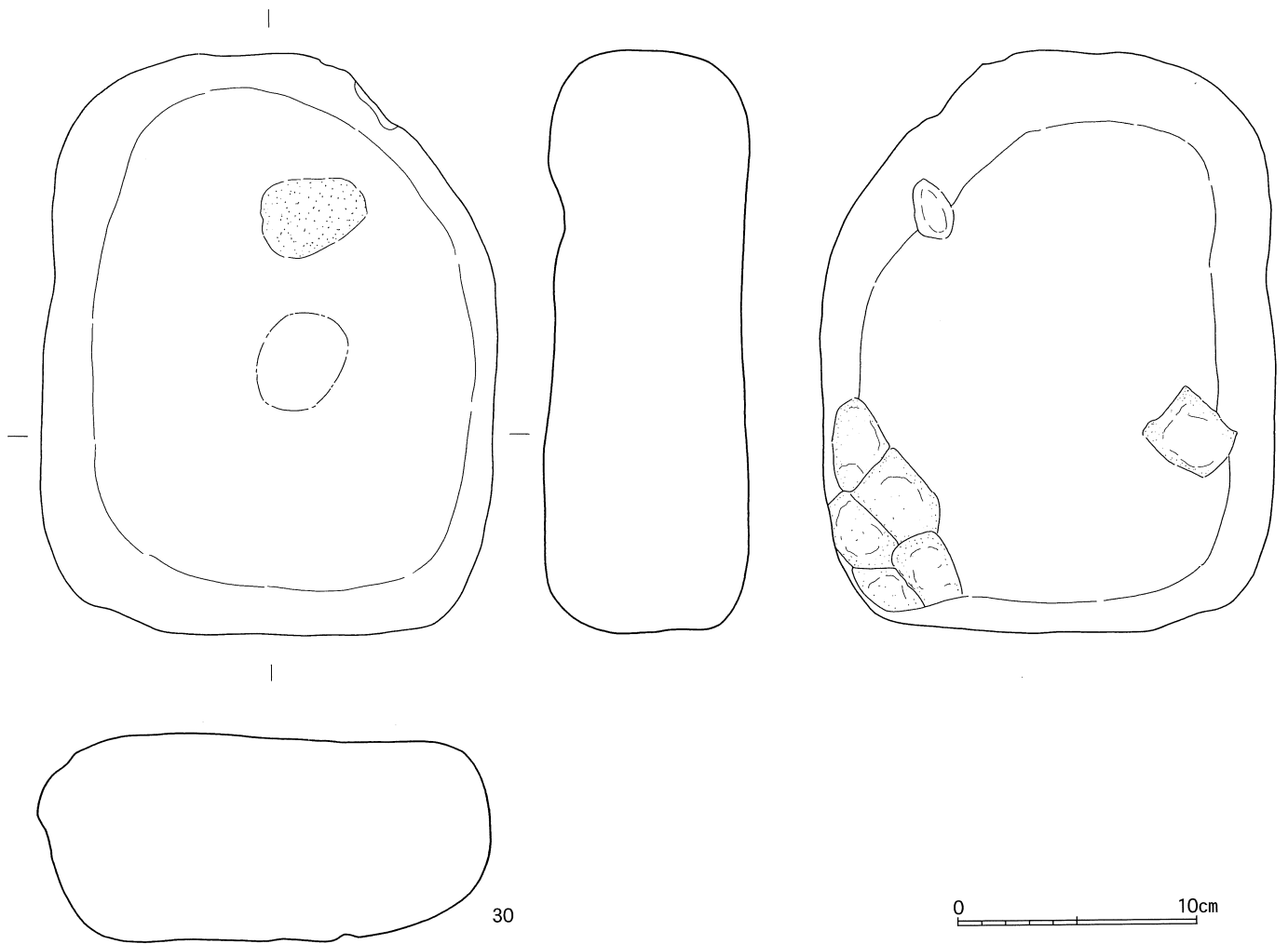


0 10cm

第11図 SH04出土遺物② (1/3)



29

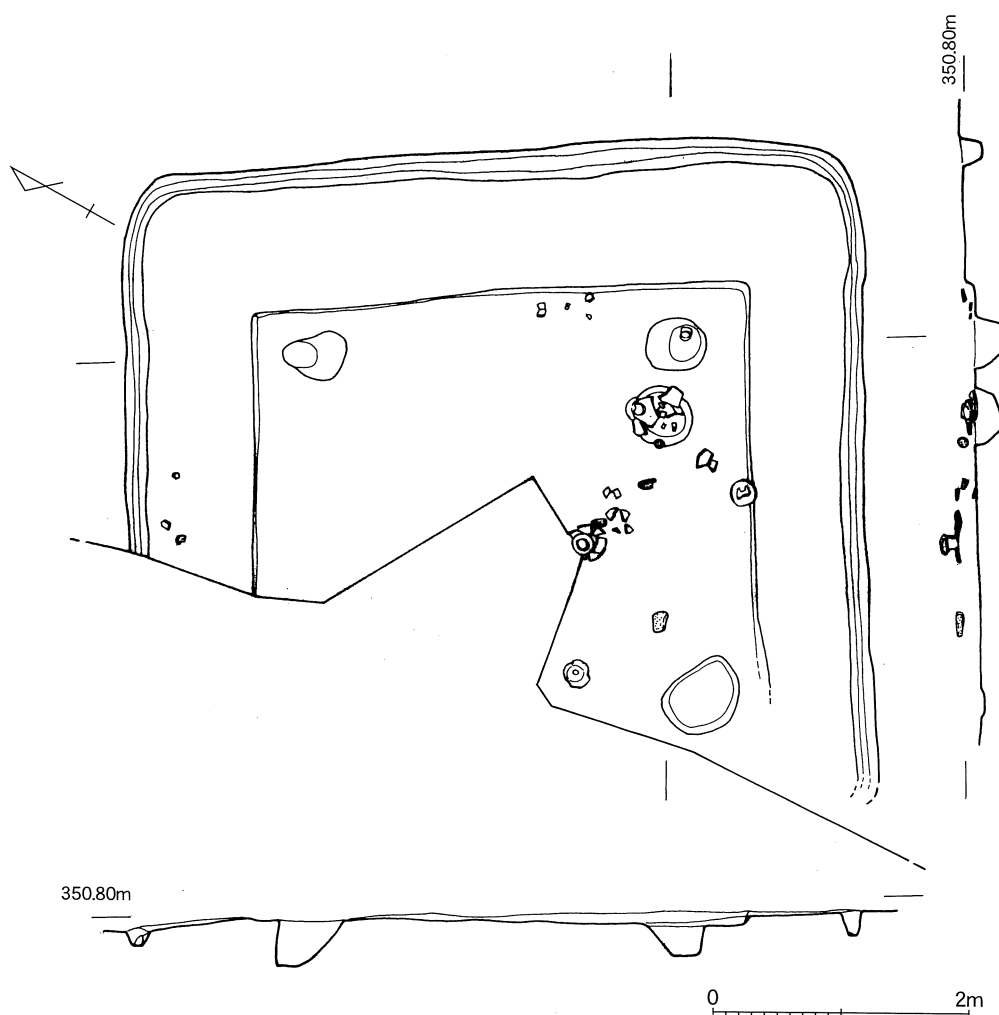


30

0 10cm

第12図 SH04出土遺物③ (1/3)

指頭痕・削り痕が認められる。21も甕の胴部で、外面に横方向の叩きが認められ、叩きの後にナデ仕上げが施されている。22・23は砥石、24～26は磨石・叩石で、特に24は周縁部に入念な磨研が施されている。27～30は台石で、30の中央部には赤色顔料の付着が認められる。



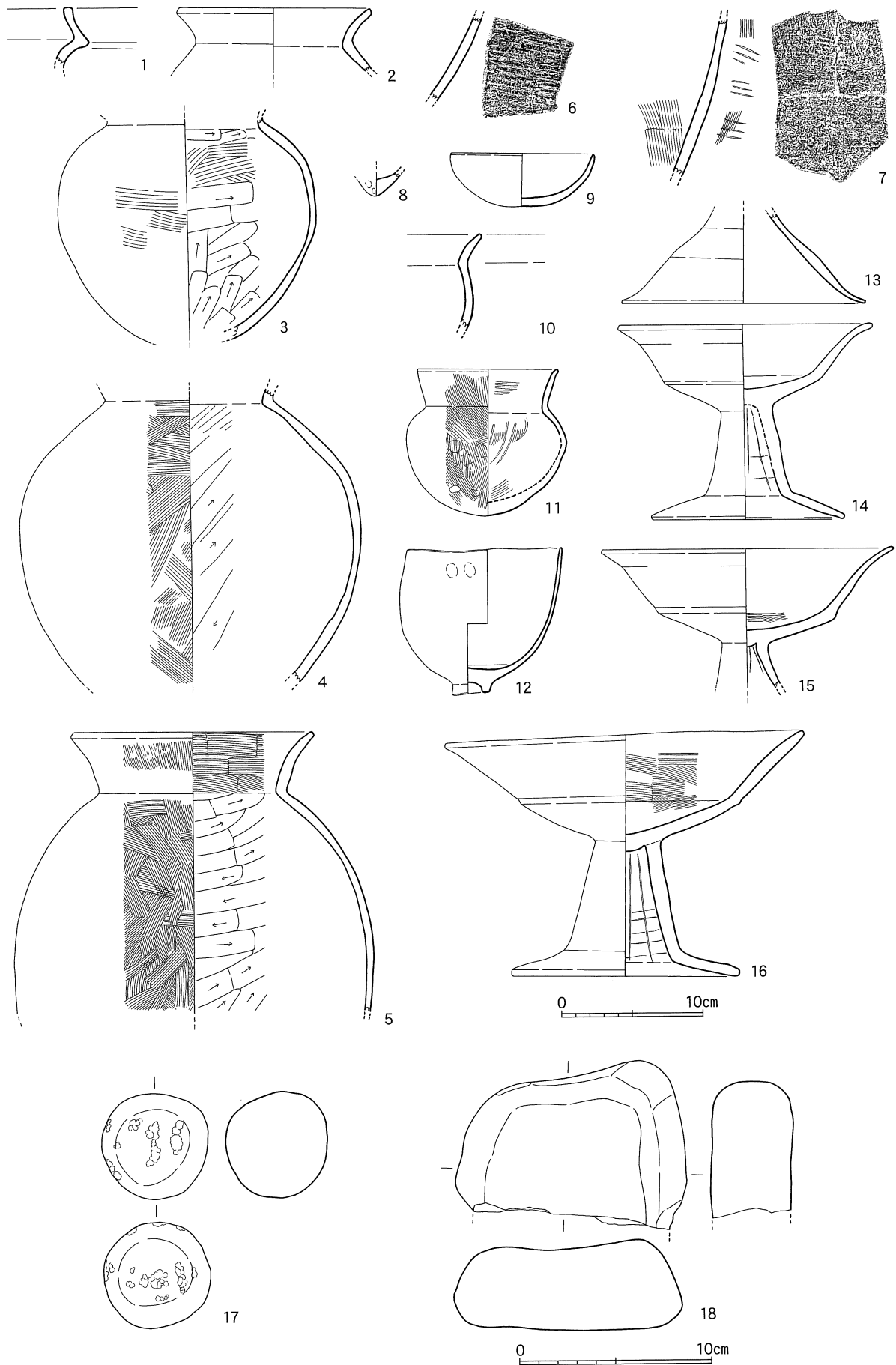
第13図 住居跡SH05実測図 (1/60)

#### SH05 (第13図)

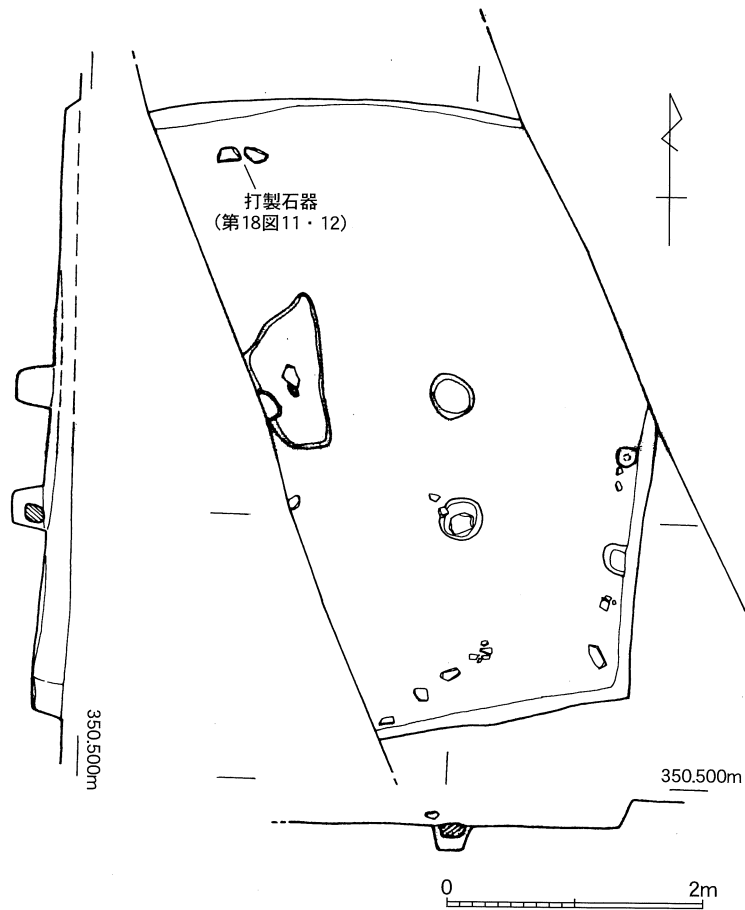
I 区のA-2・3区とB-2・3区に位置する。遺構はSH07・SH11を切る。遺構の西側は調査区外に延びる。遺構ラインは直線的で二辺がほぼ残っていることから、南北5.9m、東西5.3mの規模を有する隅丸方形の住居跡であることがわかる。この遺構ラインは壁ではなく、壁周溝である。落差は25cmを測る。壁周溝に並行するように内側にも方形の落ちがあるが、ベッド状遺構であろう。主柱穴は3基が検出されており、配置状況から本来4本柱の主柱穴と推定される。柱穴中心部からの柱穴間は南北で3.1m、東西で2.8mである。出土遺物から、古墳時代前期の所産と推定される。

#### SH05出土遺物 (第14図)

1は二重口縁の壺で、二次口縁の外面は無文となる。2～5は甕で、外面に刷毛目、内面には削りの後に刷毛目または削りのみが施される。6・7は甕の胴部で外面に叩きの後、刷毛目または叩きのみが認められる。8は尖底状を呈する小型の底部で、甕の底部である可能性がある。9は小型の鉢である。10・11も鉢で、甕を小型にしたような形態を呈する。11は底部が丸底で、内外面に刷毛目を施す。12も鉢で、砲弾形の胴部を有し、底部には粘土紐を巻き付け、高台状の小さな底部を形成する。13は器種不明であるが、脚部として図示している。14～16は高坏である。17は磨石、18は台石である。



第14图 SH05出土遺物 (1/4, 1/3)



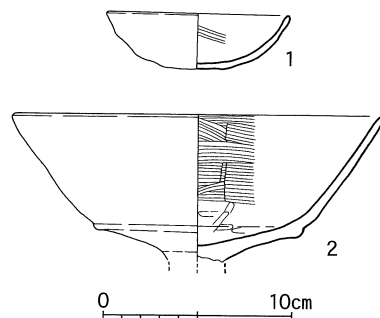
第15図 住居跡SH06実測図 (1/60)

SH06 (第15図)

I 区の C-1・A'-2 区に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、単独で構築されている。遺構の規模は東西4.0m以上、南北5.0mを測り、壁の落差は9cmである。遺構内部から2基の柱穴が検出されているが、支柱穴かどうかは不明である。また、遺構西側に不整形の浅い掘り込みがあるが、これも住居跡と直接関連するものかどうか不明である。住居跡の内部からは土器類の出土は少ないが、埴や高坏があり、石器類としては磨石や叩石が一定量出土している。また、遺構北西側の床面近くから、打製石器が2個体並んだ状態で出土している。打製石器は縄文時代後期以降の所産と思われるが、遺構の構築時期との兼ね合いから、この住居跡に帰属する遺物ではなく混入品と考えておきたい。出土遺物から、遺構の構築時期は古墳時代前期と推定される。

SH06出土遺物 (第16~18図)

1は小型の土師器鉢で、底部は丸底を呈する。2は高坏の坏部である。1・2は古墳時代前期に比定される可能性が高い。3~10は磨石・叩石である。11・12は周縁部に加工を施す打製石器で、縄文時代後期以降の所産と推定されることから、混入品であろう。

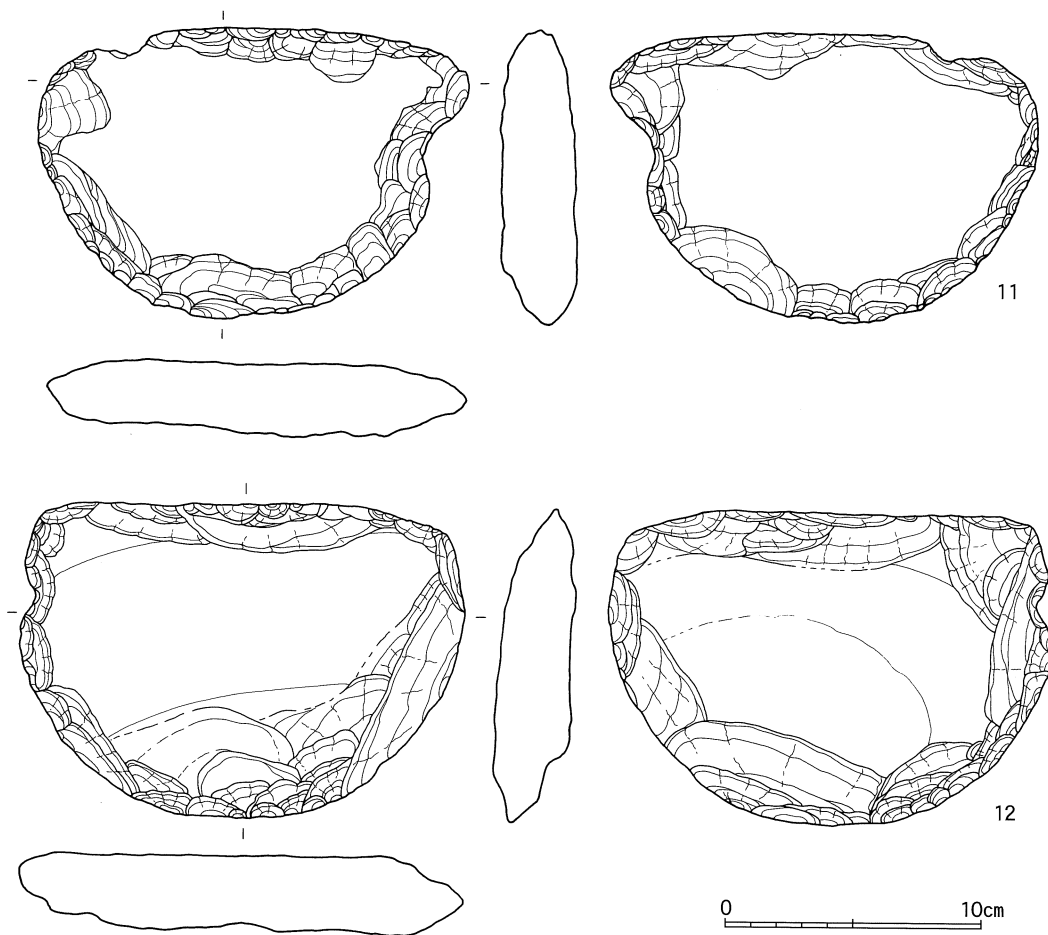


第16図 SH06出土遺物① (1/4)



第17图 SH06出土遺物② (1/3)





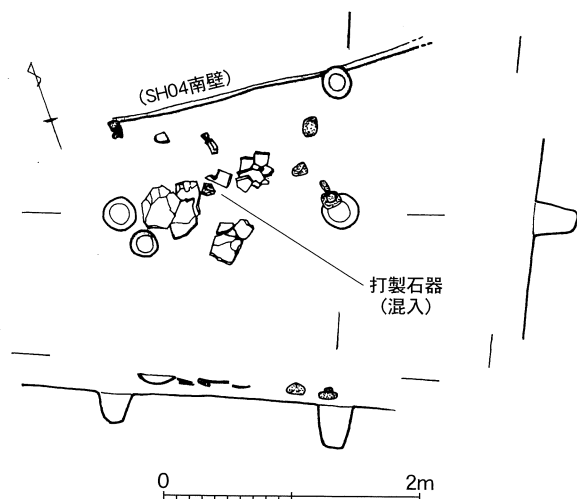
第18図 SH06出土遺物③ (1/3)

SH07 (第19図)

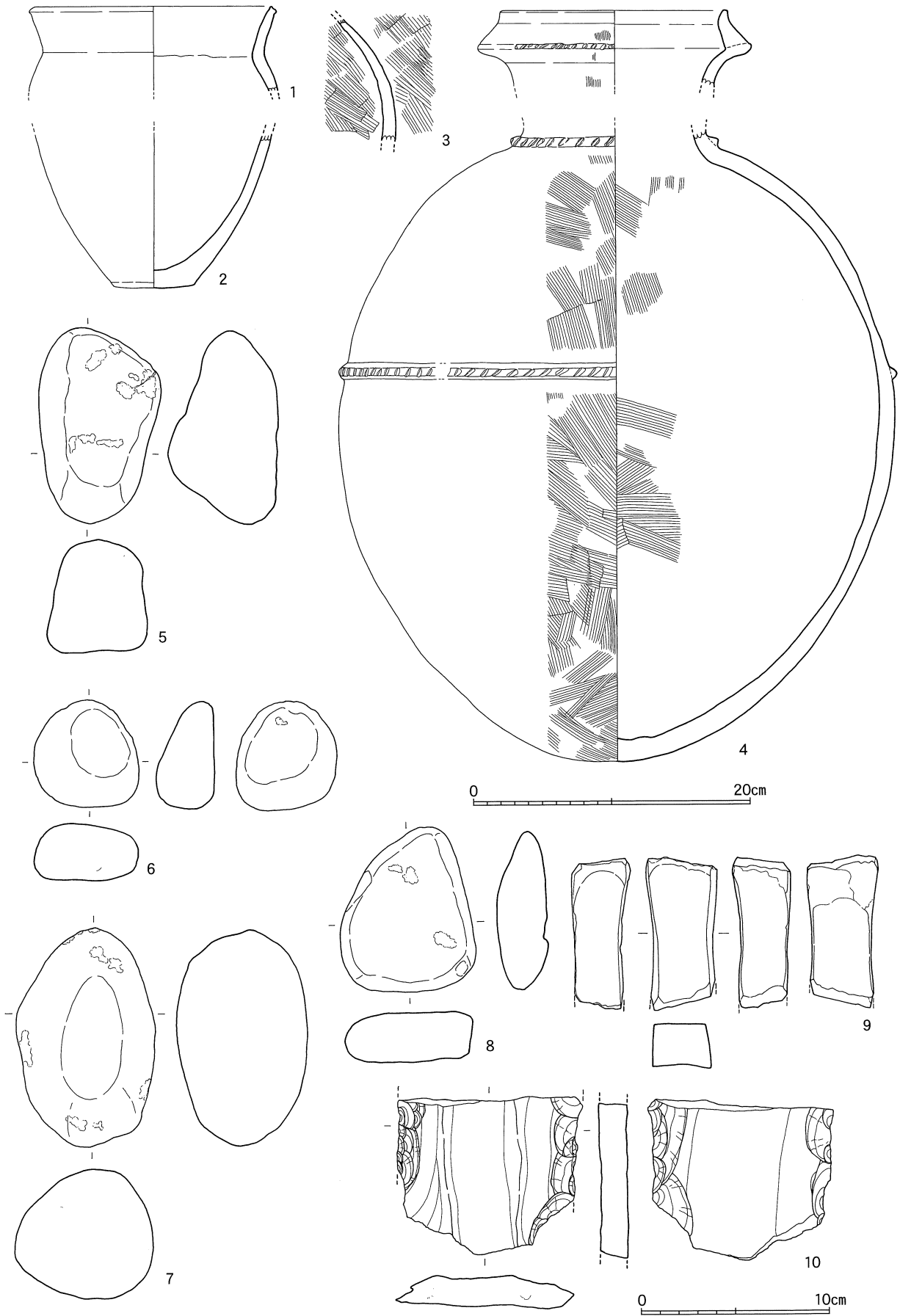
I 区のA-2区とB-2区の境界に位置する。遺構はSH04とSH05に切られている。そのため残存状態はよくなく、遺構プランは残っていない。住居跡であると解釈した理由は、2箇所の柱穴間に遺棄された土器片が残っていたことによる。2基の柱穴はほぼ東西に並ぶ柱穴は主柱穴と推定され、遺物の時期から方形の住居跡であったと推定される。出土遺物から、古墳時代前期の所産と推定される。

SH07出土遺物 (第20図)

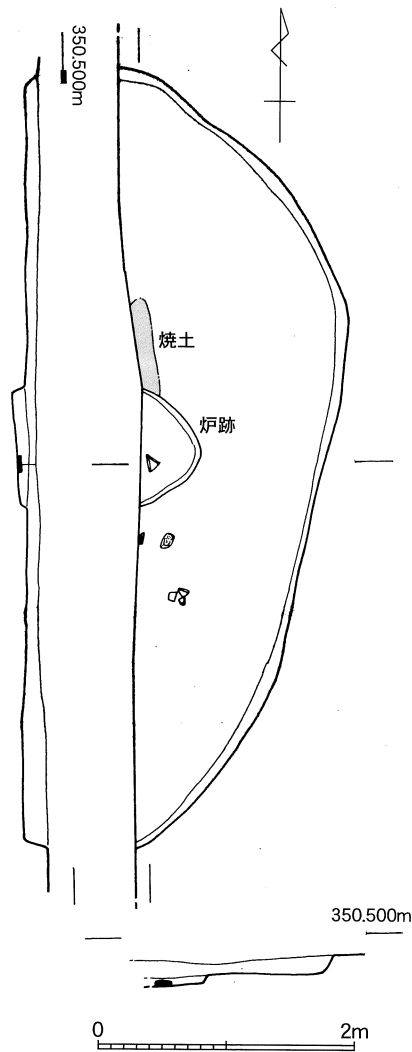
1・2は弥生土器の甕である。1は口縁部から胴部上位の破片で、内外面にナデを施す。2は底部から胴部下位の破片で、レンズ状の平底をもつ。3は壺の胴部から肩部の破片で、内外面に刷毛目調整を施す。4は複合口縁を有する壺で、頸部と胴部中位に刻目のある突帯を有する。また、1次口縁と2次口縁の境界部にも刻目を施している。底部は丸底となる。古墳時代前期の所産であろう。5～8は磨石・叩石、9は砥石である。10は扁平打製石器で、縄文時代後期以降の所産と思われる混入品である。



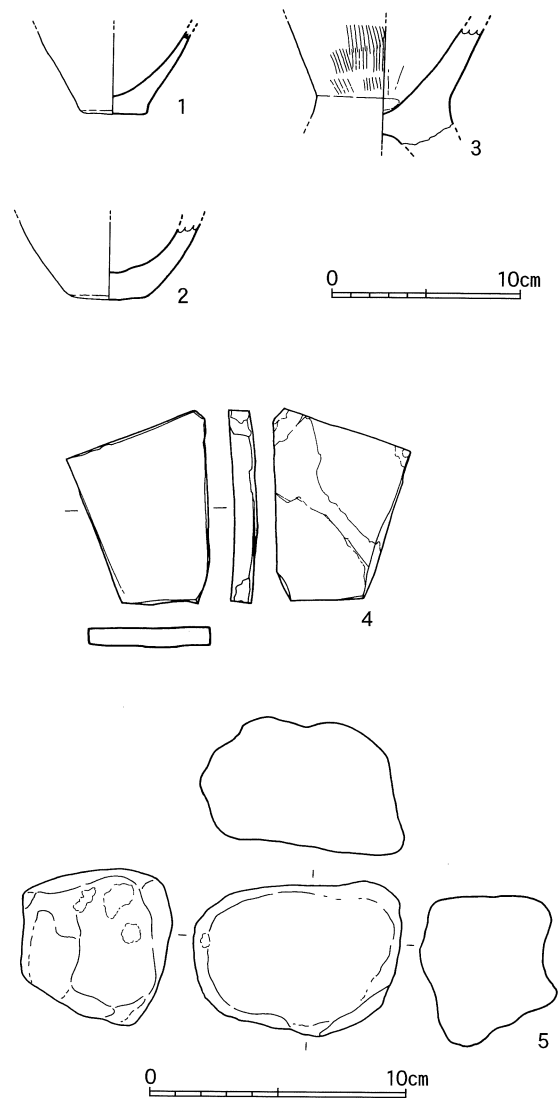
第19図 住居跡SH07実測図 (1/60)



第20図 SH07出土遺物実測図 (1/4, 1/3)



第21図 住居跡SH08実測図 (1/60)



第22図 SH08出土遺物実測図 (1/4, 1/3)

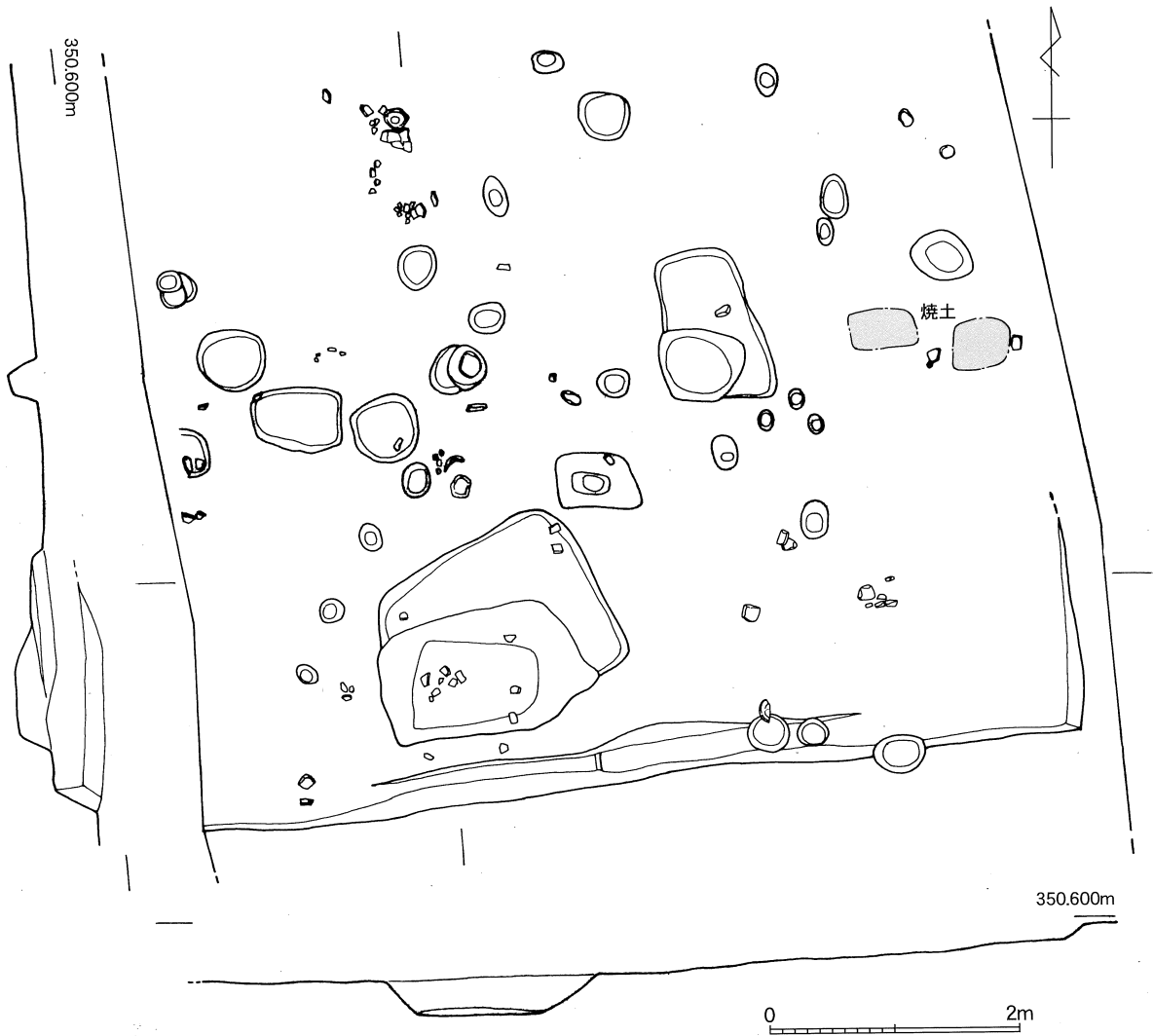
#### SH08 (第21図)

I 区のA-4区とB-4区に位置する。遺構は西側の未調査区へ延びる。遺構のプランは弧状であり、径約7m程度の規模を有する円形の住居跡と推定される。壁での落差は10~20cmで、わりあいしっかりした残存である。支柱穴は検出できなかったが、浅い皿状の炉穴が調査区境に位置していた。炉穴の北側には焼土・炭などが薄く分布する範囲を確認できた。出土遺物は少数で、詳細な時期を確定できる遺物はないが、円形プランの住居跡であるため、その構築年代は弥生時代(中期?)に遡る可能性が高い。

**SH08出土遺物 (第22図)** 1~3は弥生土器の甕で、1は平底、2はレンズ状の平底、3は脚台との接続部である。4は砥石、5は叩石である。

#### SH09 (第23図)

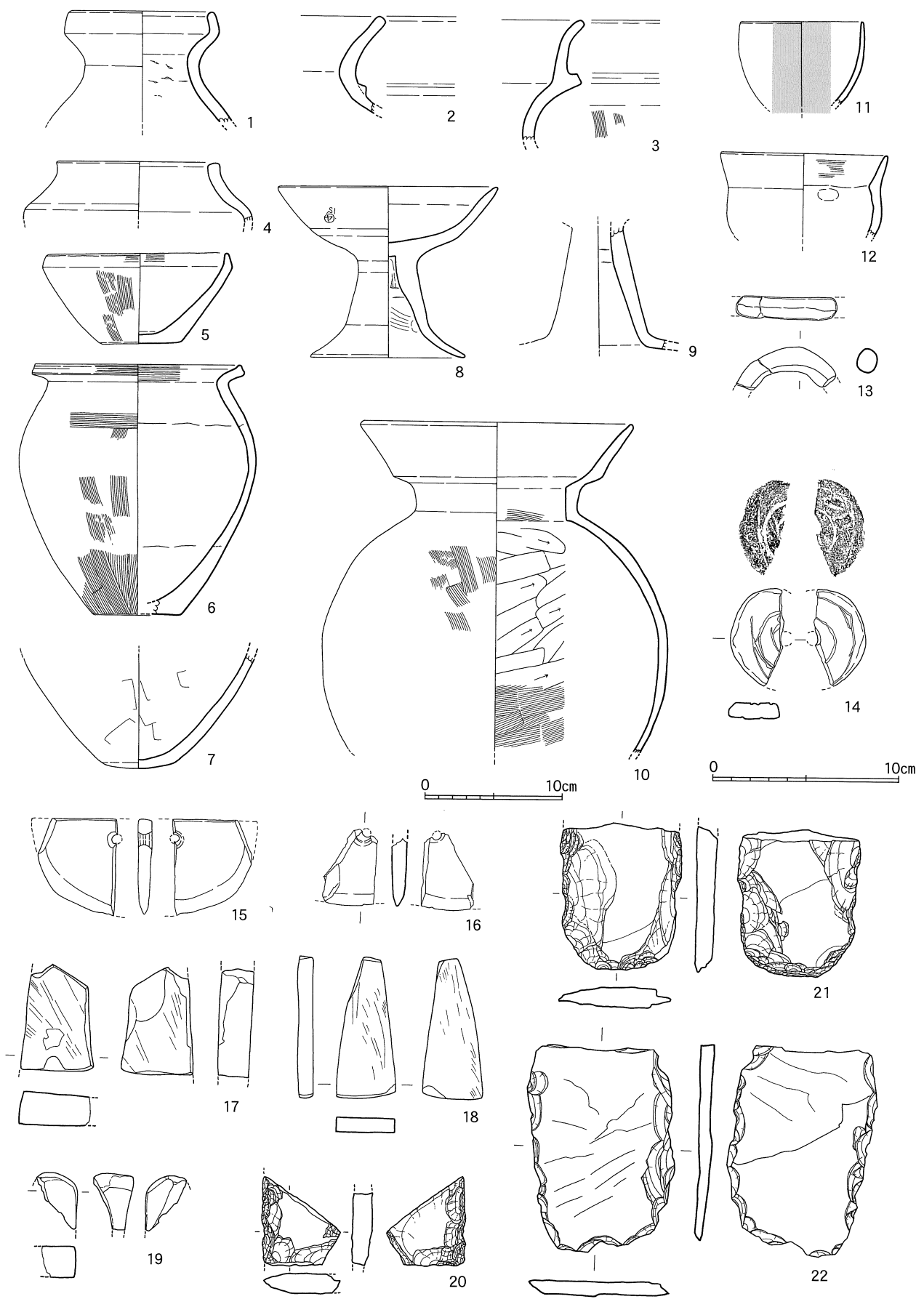
I 区のB-3区・B-4区に位置する。遺構検出の段階で、調査区を東西に横断するような遺構プランが認められた。その後、東側の調査区東側の壁寄りの地点で北方向へ僅かに屈折する状況が観察されたことと壁直下で壁周溝が観察されたことで住居跡であることがわかった。しかし、対応する北側の壁や柱穴・付属施設などは明確でない。南側壁にあたる東西方向の遺構ラインが約7.2mなので、少なくとも一辺7.2m以上の方形住居跡であったことが推定される。壁での落差は約30cmである。出土遺物には弥生土器や土師器、石庖丁や縄文時代の



第23図 住居跡SH09実測図 (1/60)

石器などがあり、時期の異なるものが混在している。また、石製紡錘車が出土していることも注目される。住居跡の構築時期を示すものとしては、土師器の二重口縁壺や小型丸底壺などがあり、古墳時代前期の所産である。

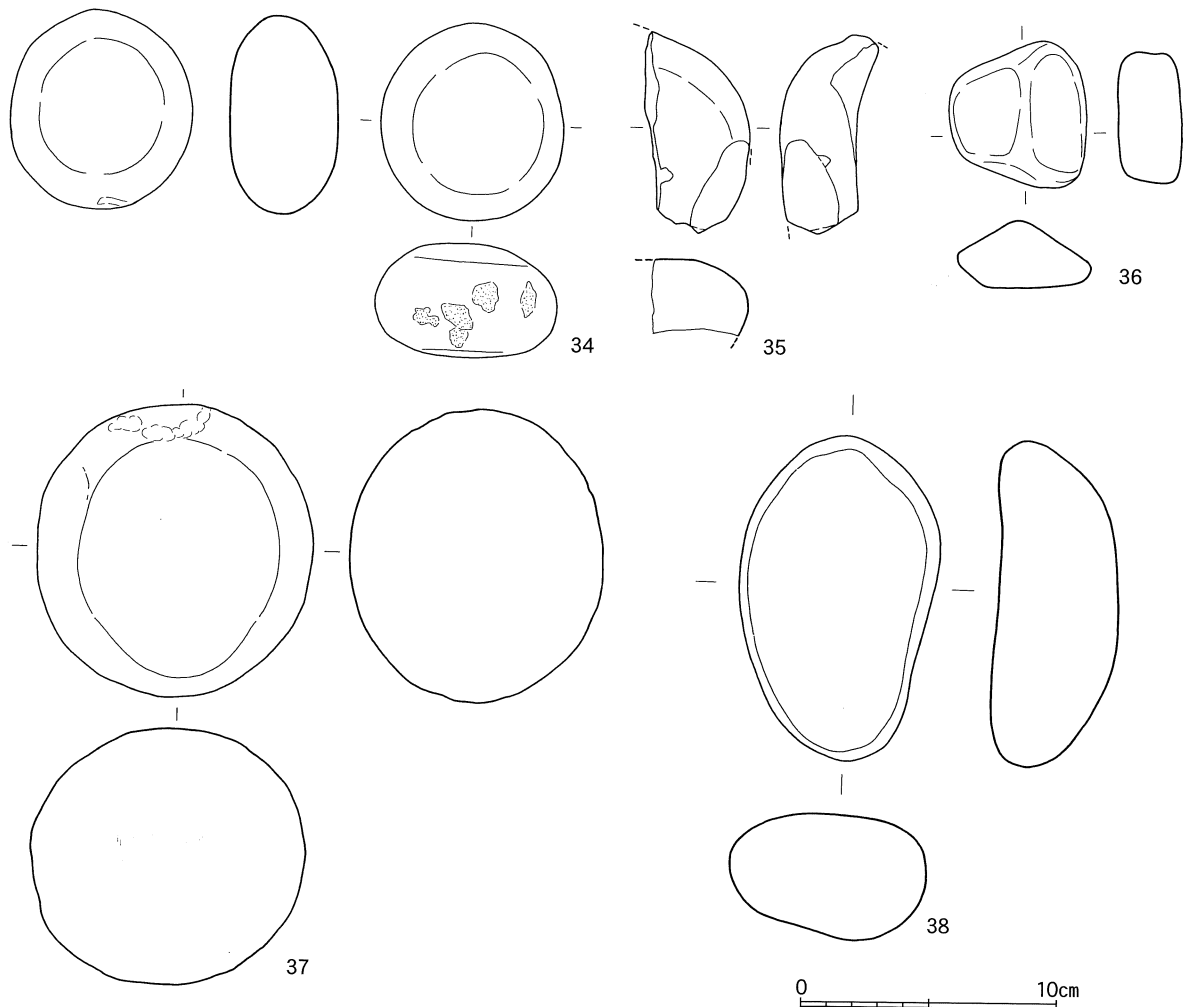
SH09出土遺物 (第24～26図) 1は弥生時代後期の複合口縁壺で、頸部から口縁部にかけての破片である。2も壺の口縁部と思われる、肩部に断面三角形の突帯が貼付られている。3は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての複合口縁壺である。口縁部は大きく開き、一次口縁と二次口縁の境が外側に大きく突出する。4は鉢で、内外面にナデ調整を施す。5も鉢で、内湾気味に立ち上がる口縁部と平底をもつ。胴部外面に刷毛目調整が認められ、口縁部内外面にはナデ調整を施す。6は甕で、「く」の字状に屈曲する口縁部と平底をもつ。底部から胴部に縦方向の刷毛目調整が認められ、胴部の屈曲部付近には横方向の刷毛目が施されている。また、口縁部内外面にも刷毛目調整があり、胴部内面には粘土帯積み上げ痕が認められる部位がある。弥生時代後期の所産と考えられる。7はレンズ状の丸底をもつ甕の底部で、内面に削り調整が認められる。8・9は高坏である。10は茶白山型の二重口縁壺で、器表面はナデによって仕上げられているが、肩部付近に刷毛目が残存している。胴部内面には削りが施されており、胴部内面下位には削りの後に刷毛目調整が施されている。古墳時代前期の布留式期の指標となる遺物である。11は逆砲弾形の器形を呈する鉢で、内外面にナデが施され、赤色顔料が塗布されている。12は小型丸底壺で、底部を欠損する。内外面ともナデ仕上げされているが、内面の一部には刷毛目や指頭痕が残る部位が認められる。13は土製の遺物で、把手状もしくは円環状を呈するものである。用途・器



第24图 SH09出土遺物① (1/4, 1/3)



第25図 SH09出土遺物② (1/3)



第26図 SH09出土遺物実測図③ (1/3)

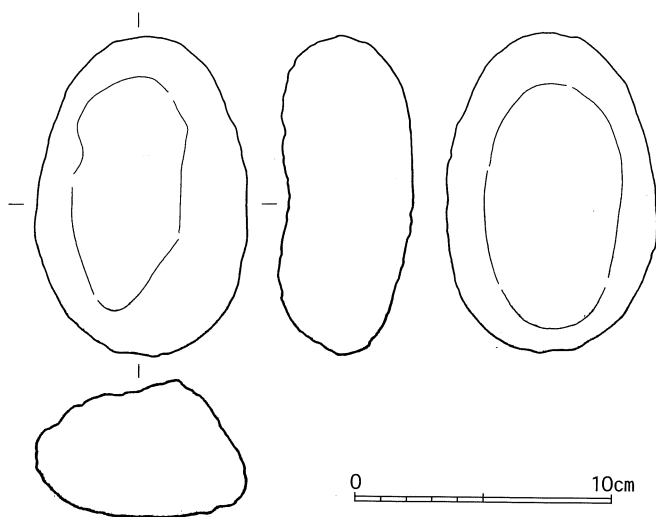
種は不明。14は石製紡錘車で、中央に径5mm程度の貫通穴があり、内外面には渦状(?)の沈線が認められる特異な製品である。15・16は石庖丁で、遺構の時期と合わないことから、混入品と考えられる。17~18は砥石である。20~22は打製石器で、縄文時代の所産と考えられることから、これらも混入品であろう。23~38は磨石・叩石である。

#### SH10 (第4図)

I区のア-1区に位置し、遺構図面は切り合い関係を明示するため、第4図で示した。SH01・SH02・SH03に切られ、残存状態はよくない。壁の落差は9cmである。残存する遺構プランから、少なくとも一辺が4.5m以上の方形の住居跡と推定される。主柱穴等は検出されていない。出土遺物は僅少で、詳細な時期を判断できる遺物はない。切り合い関係から、構築時期は古墳時代前期以前と推定される。

#### SH10出土遺物 (第27図)

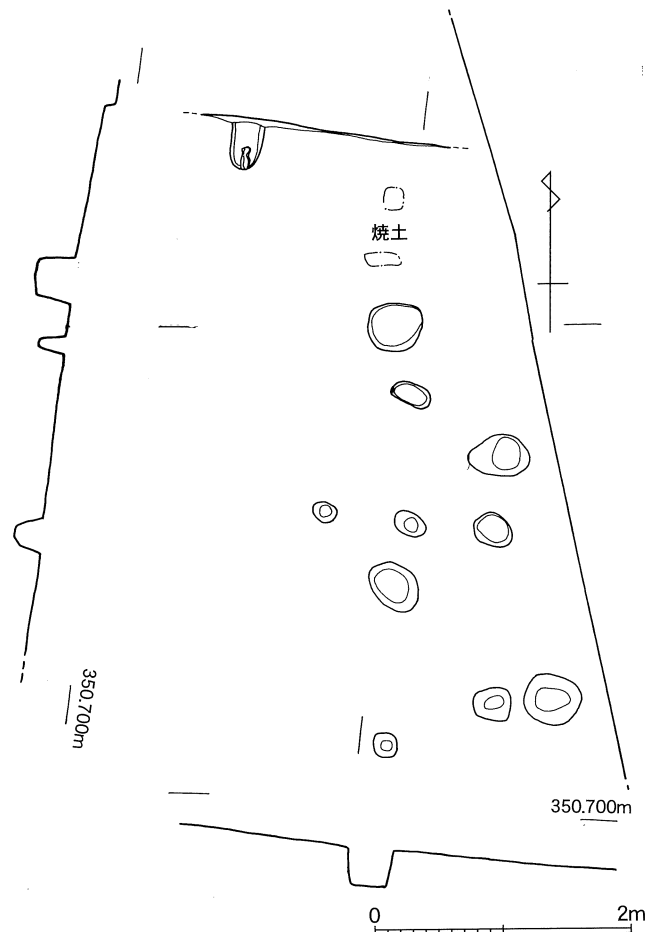
図示した遺物は、磨石である。



第27図 SH10出土遺物 (1/3)

SH11

遺構番号が欠番となるものである。当初、住居跡として調査を進めていたが、調査途中より、検出した浅い掘り込みが住居跡と断定できず、遺構番号を欠番とした。出土遺物は認められない。



第28図 住居跡SH12実測図 (1/60)

#### SH12 (第28図)

I 区のB-2区とB-3区に位置する。遺構の前後関係はSH05に切られる関係にあり、残存状態は極めてよくない。遺構ラインは東西方向に直線的であることから方形の住居跡であることがわかる。遺構ラインは住居跡の北側の壁で、落差は8cmである。支柱穴は二つあり、南北に並ぶように位置しており、本来は四カ所の支柱穴が存在したのであろう。支柱穴と北壁との間に赤色顔料が散布していた。出土遺物から、遺構の構築時期は古墳時代前期と推定される。

#### SH12出土遺物 (第29図)

1は土師器の甕で、頸部に刻目突帯を貼付している。2～5も甕で、内外面にナデ調整もしくは刷毛目調整が認められる。

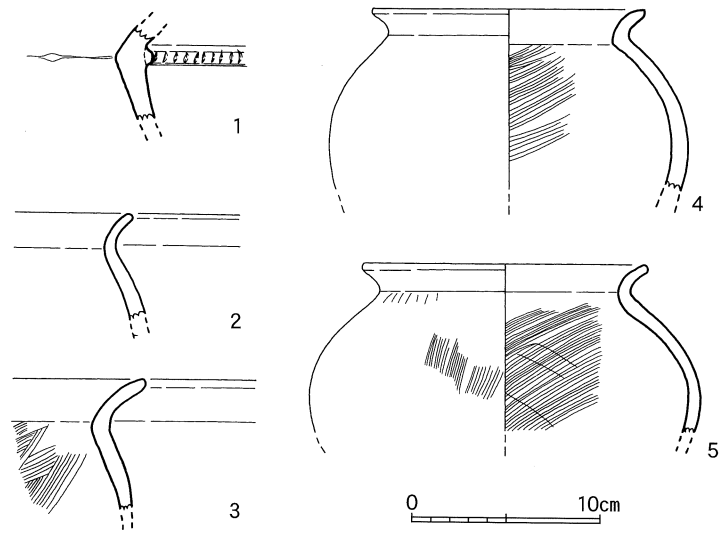


SH13 (第30図)

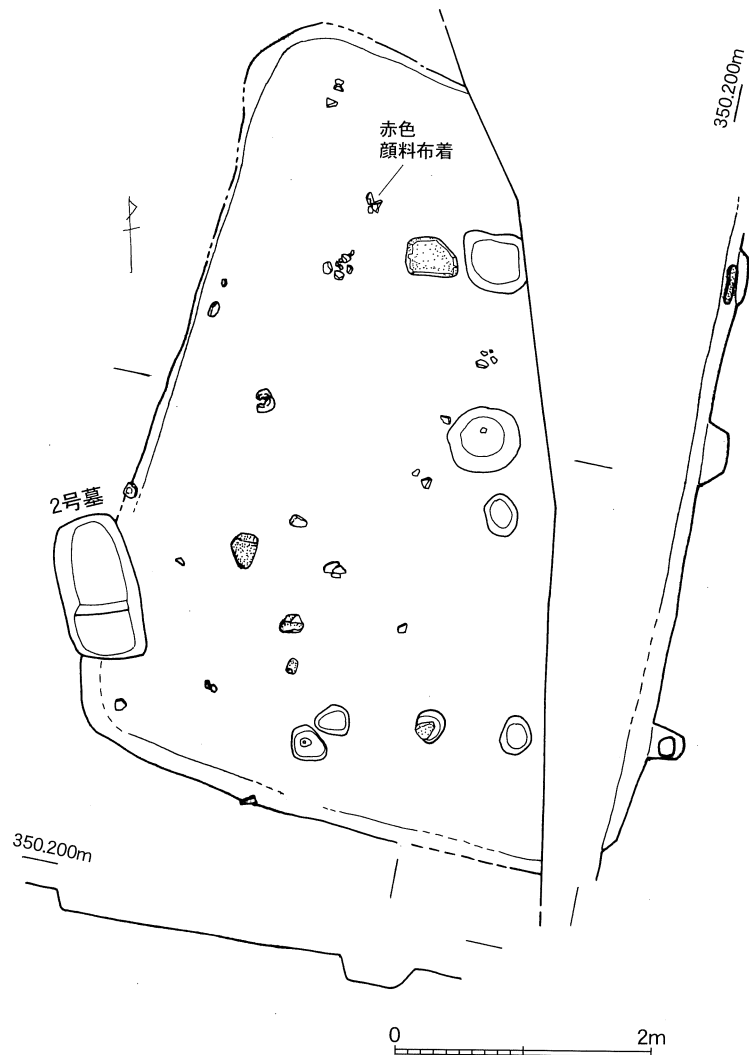
Ⅱ区のB-2区に位置する。この辺りは中世の遺構が密集するところで、本遺構の覆土上面から多数の柱穴が掘り込まれており、遺構の南西隅付近には戦国時代(16世紀代)に構築された2号墓との切り合いが認められる。現状での規模は、東西3.1m、南北6.0mを測り、遺構の東側は調査区外に伸びる。おそらく一辺6m程度の規模を有していた方形の住居跡と推定される。壁での落差は約10cmである。遺構床面から、柱穴が複数検出されているが、支柱穴の配置等は不明である。遺構内部からは須恵器や土師器のほか、床面近くから大型の台石が出土している。台石の中には、赤色顔料の付着がみられるものもある。遺物には複数の時期が認められ、時期の判断は難しいが、遺構の構築時期は古墳時代中期(5世紀代)に比定されよう。

SH13出土遺物 (第31・32図)

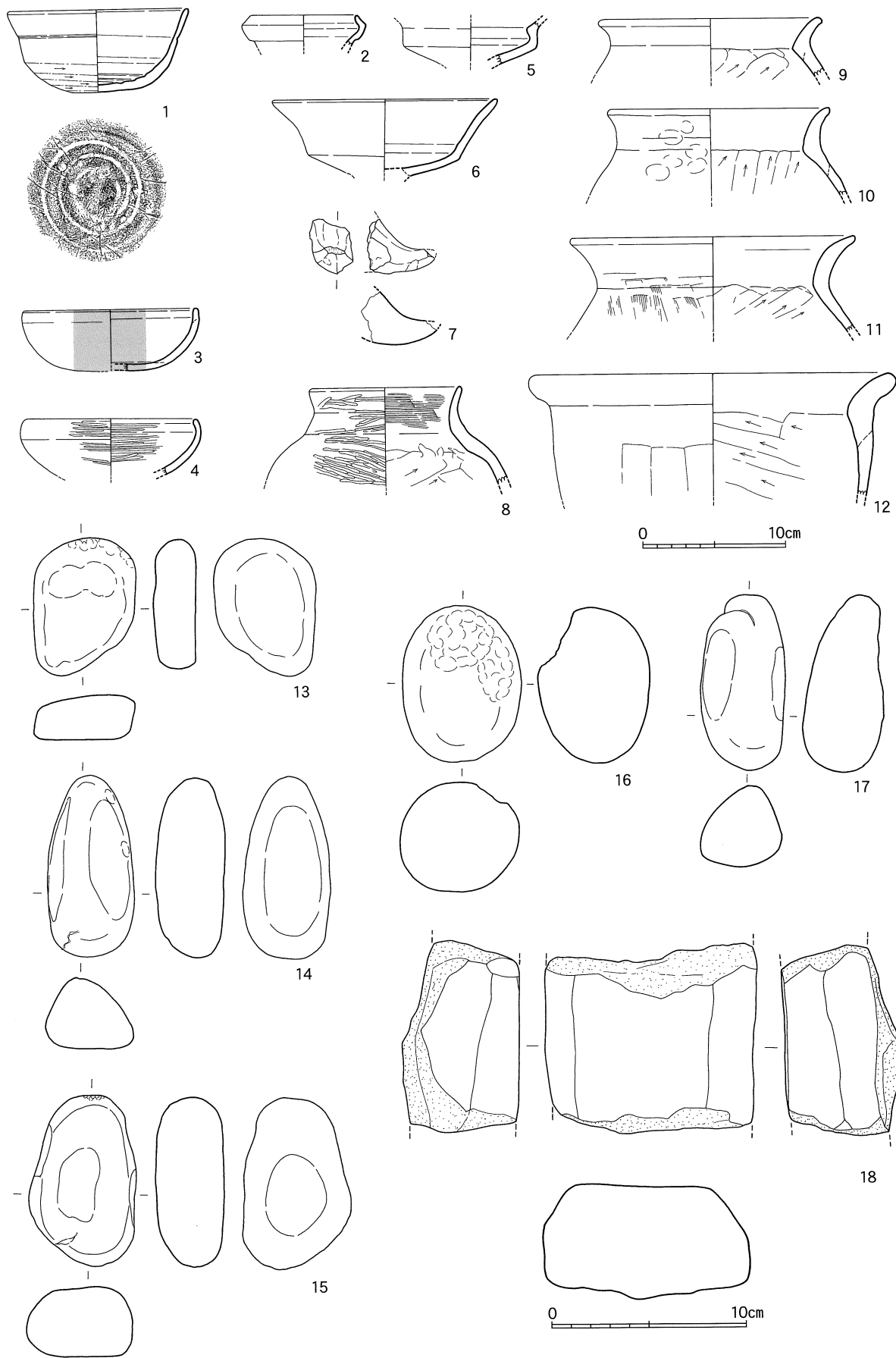
1は須恵器の壺で、類例の少ない資料である。底部に回転ヘラ削りを施す。2も須恵器であるが、小片のため、器種不明の製品である。反転して、上下が逆になる可能性も考えられる。3・4は土師器の壺である。3には内外面に赤色顔料の塗布が認められ、4には内外面にミガキが施されている。5も小片で器種不明であるが、高坏の坏部と考えて、そのように図示している。6は高坏の坏部で、内外面にナデが施されている。7は小型の甗で、把手の部位であると考えている。8~12は甕である。13~18は磨石・叩石、19~20は台石で、そのうち19については赤色顔料の付着が認められる。



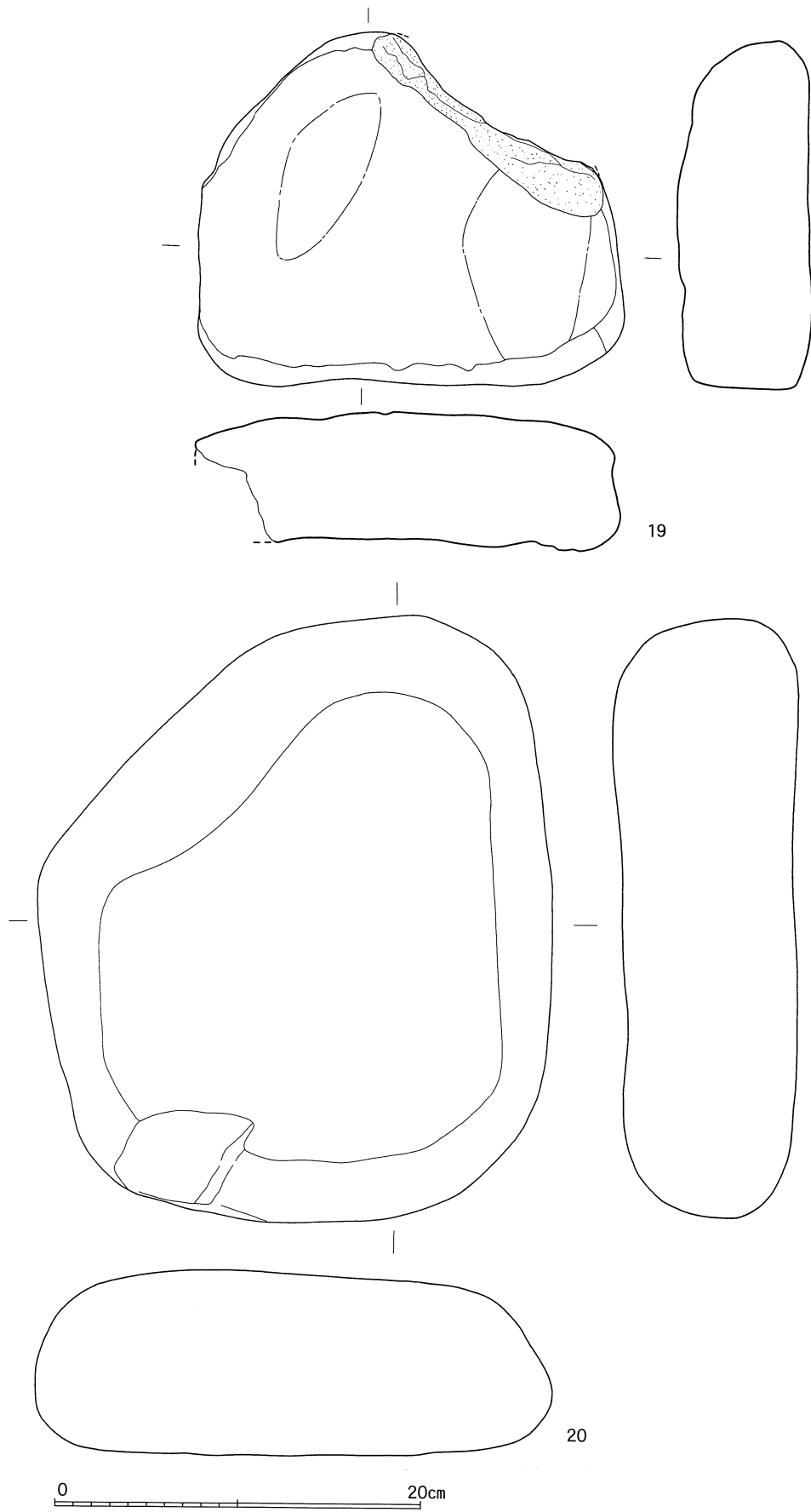
第29図 SH12出土遺物実測図 (1/4)



第30図 住居跡SH13実測図 (1/60)



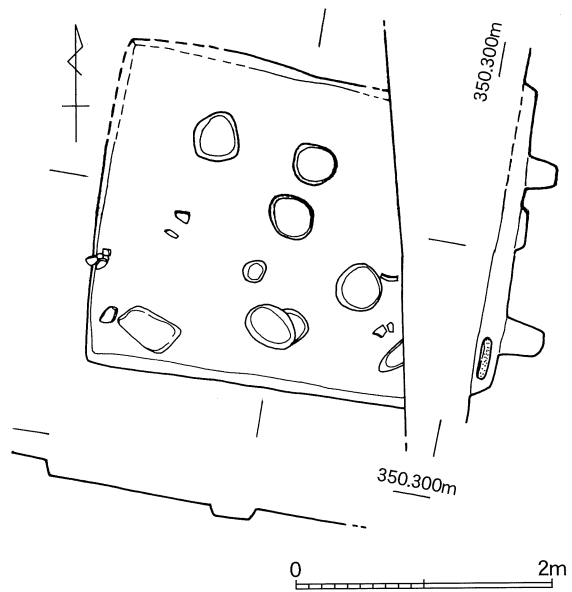
第31图 SH13出土遺物① (1/4, 1/3)



第32図 SH13出土遺物② (1/3)

SH14 (第33図)

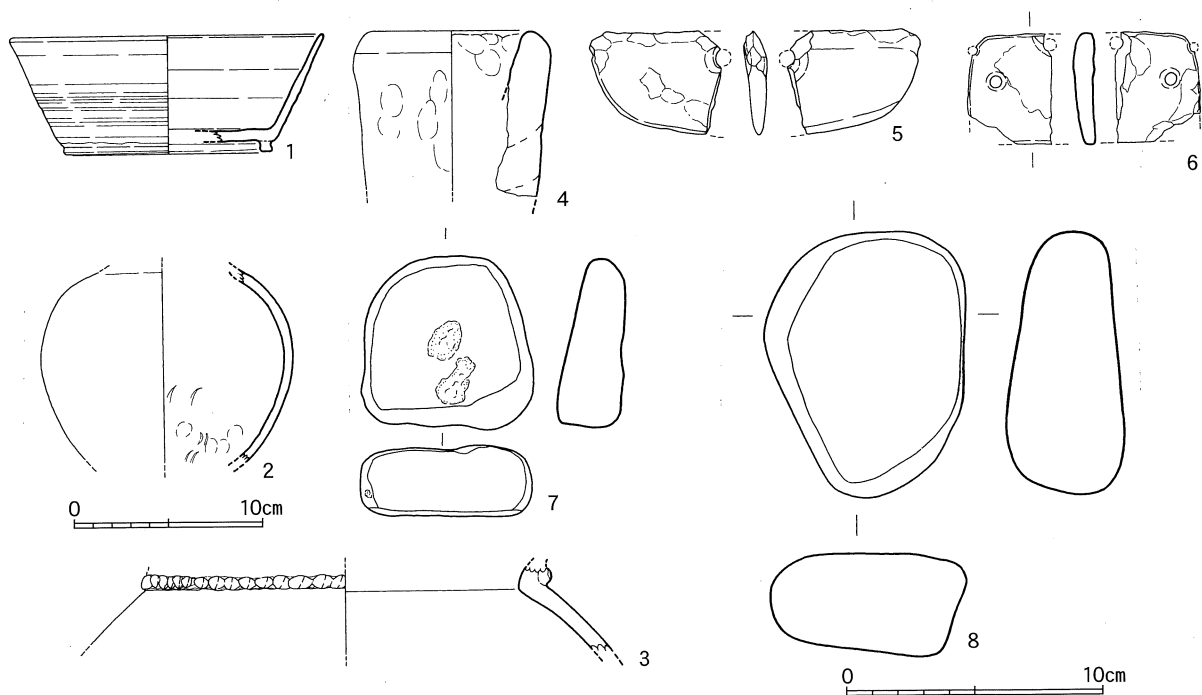
Ⅱ区のB-3区に位置する。この辺りも中世の遺構が密集するところで、本遺構の覆土上面から多数の柱穴等が掘り込まれている。現状での規模は、東西2.5m、南北2.5mを測り、遺構の東側は調査区外に伸びる。おそらくは方形プランの住居跡(竪穴建物)と判断されるが、住居跡としては極めて小規模である。壁での落差は約15cmを測る。床面には複数の柱穴が存在しているが、支柱穴の配置等は不明である。出土遺物には石庖丁・土師器・須恵器など、時期の異なるものが混在し、また台石や磨石なども出土している。このうち、8~9世紀代の須恵器や中世のフイゴ羽口、石庖丁などは混入品、もしくは取り上げミスであろう。構築時期を特定するのは難しいが、古墳時代前期に比定される可能性が考えられる。



第33図 住居跡SH14実測図 (1/60)

SH14出土遺物 (第34図)

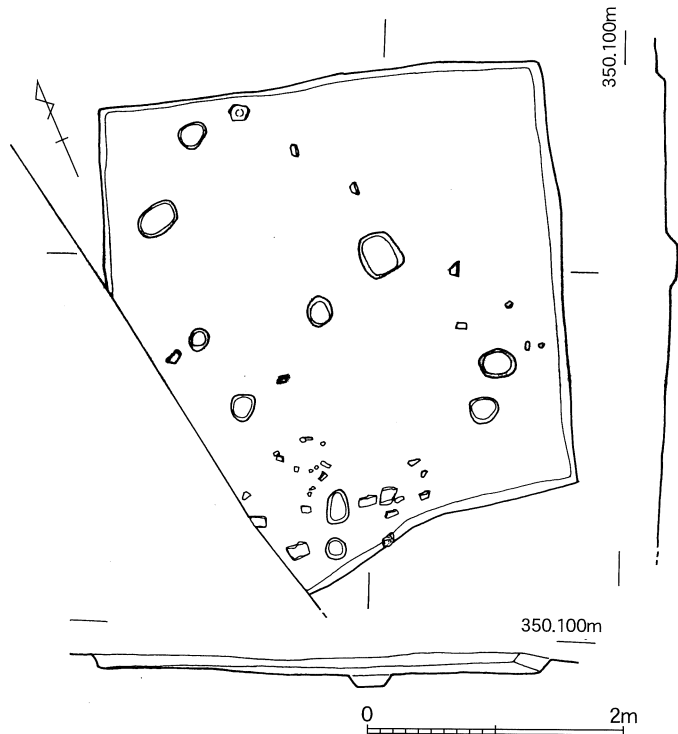
1は須恵器の高台付き壺で、8~9世紀代の所産である。2は土師器の壺と思われ、胴部下に指頭圧痕が認められる。3も土師器の壺で、頸部付近の破片である。口縁部との境に押圧突帯を巡らせている。器表面が風化しており、調整は不明である。4は土製のフイゴ羽口であり、熱変により赤化している部位が認められる。中世以降の所産である可能性が高く、混入品もしくは取り上げミスであろう。5・6は石庖丁の破片で、6については体部に3箇所以上の貫通孔が認められ、補修ないしは二次加工が行われた可能性がある。5・6の石庖丁についても、住居跡の時期と合わないため、混入品であろう。7・8は磨石・叩石である。



第34図 SH14出土遺物 (1/4, 1/3)

SH15 (第35図)

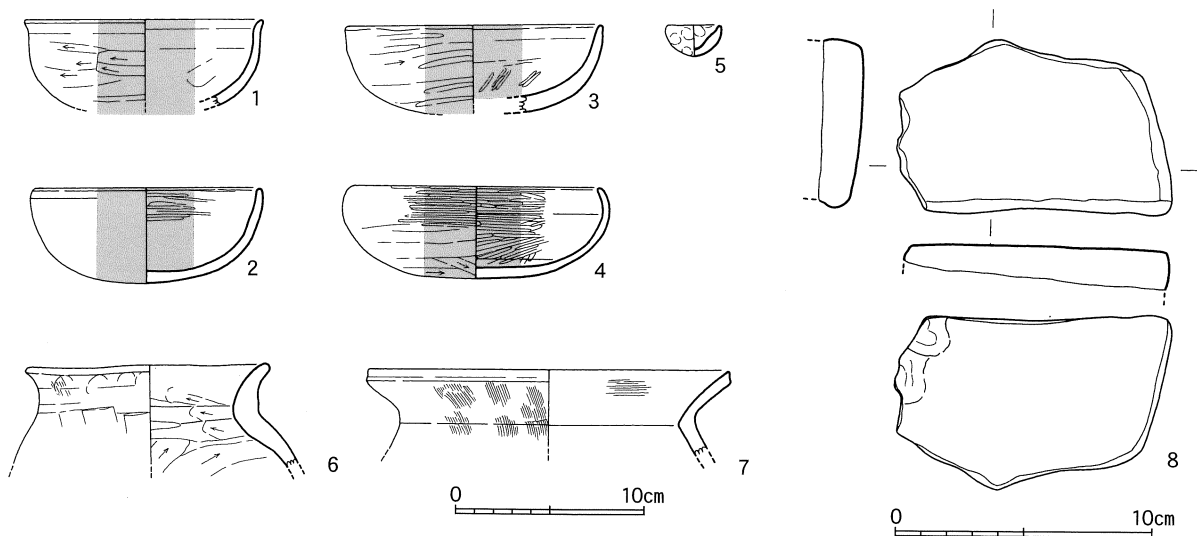
II区のA-2区に位置する。現状での規模は、東西3.6m、南北3.7mを測り、壁での落差は約10cmである。遺構の北西側は調査区外に伸びる。方形の住居跡であるが、遺構プランの南側が張り出す形で検出されている。この張り出しは本来のものであるか、調査時の掘り過ぎであるかは判断がつかない。床面には複数の柱穴が存在しているが、支柱穴の配置等は不明である。出土遺物には土師器の埴やミニチュア土器などがあり、おおむね5世紀代のものでまとまっている。遺構の構築時期は、古墳時代中期(5世紀代)に比定される。



第35図 住居跡SH15実測図 (1/60)

SH15出土遺物 (第36図)

1～4は土師器の埴である。1は口縁端部をわずかに外反させ、胴部内外面に削り調整を施す。底部は丸底で、内外面に赤色顔料の塗布が認められる。2～4も土師器の埴で、内外面にミガキ調整が施されている。このうち、3・4については内外面に赤色顔料の塗布が認められる。また、4については器壁が薄く、精選された胎土で製作されており、他地域からの搬入品ではないかという印象を受ける遺物である。1～4は5世紀後半代の所産であろう。5は小型のミニチュア土器で、内外面に手捏ね整形による指頭痕が認められる。6土師器の甕で、頸部から口縁部の破片である。胴部以下は残存しないが、長胴形になる可能性があり、内外面ともに削り調整が認められる。7も土師器甕の口縁部であるが、その形態から古墳時代前期の所産である可能性が高く、混入品もしくは取り上げミスと考えられる資料である。8は台石である。



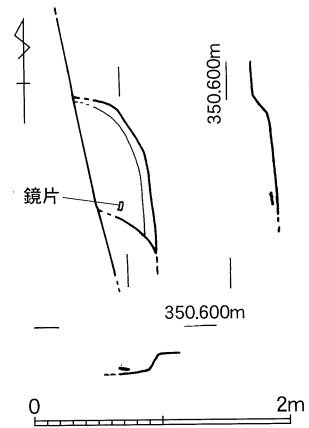
第36図 SH15出土遺物 (1/4, 1/3)

SH16 (第37図)

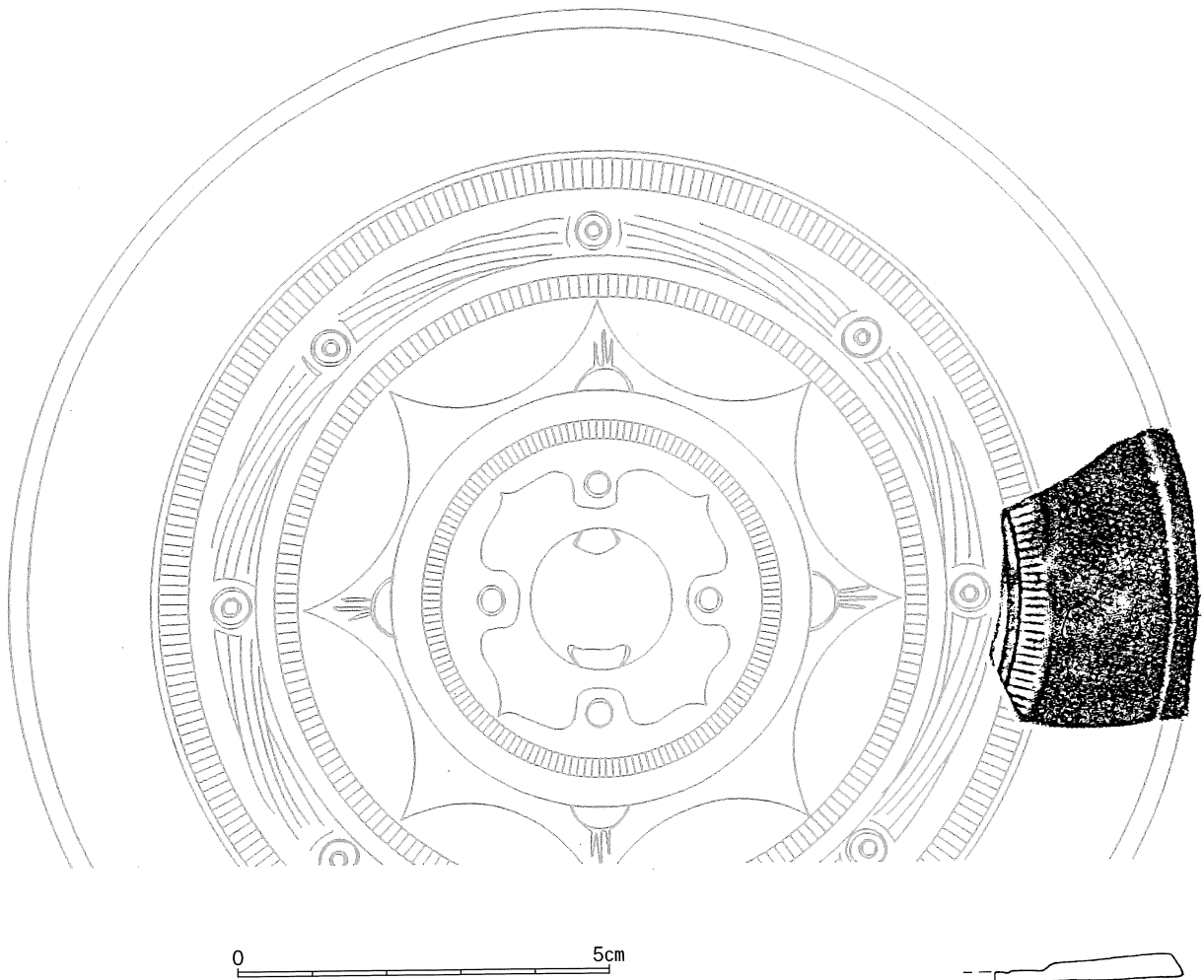
I区のA'-1区の西側調査区境付近に位置する。遺構プランは南北1.2m前後の僅かな長さもつに過ぎず、大半が近年の水田面・水路の構築に際して削平されている。床面直上と思われる部位で内行花文鏡（連弧文鏡）の破鏡（鏡片）が見つかったことから、隅丸方形の住居跡と推定した。壁での落差は約13cmである。破鏡は今回調査の出土遺物の中で最も注目に値するものであるが、残念ながら単独の出土で、相伴遺物などは認められない。住居跡は古墳時代前期の遺構と推定する。

SH16出土遺物 (第38図)

図示した遺物は、後漢代の内行花文鏡（連弧文鏡）の破片である。鏡縁と櫛歯文、内区の弧文の一部が残存している。割口は各面ともきれいに再研磨がなされており、いわゆる「破鏡」の状態である。大分県下で発見される当該時期の破鏡には、赤色顔料の塗布や二次穿孔の痕跡が認められるものが多いが、肉眼観察による限り、SH16の出土資料には赤色顔料の付着が認められないようである。残存部から計測すると、径約16cmの内行花文鏡（連弧文鏡）に復元される。



第37図 住居跡SH16実測図



第38図 SH16出土遺物 (1/1)

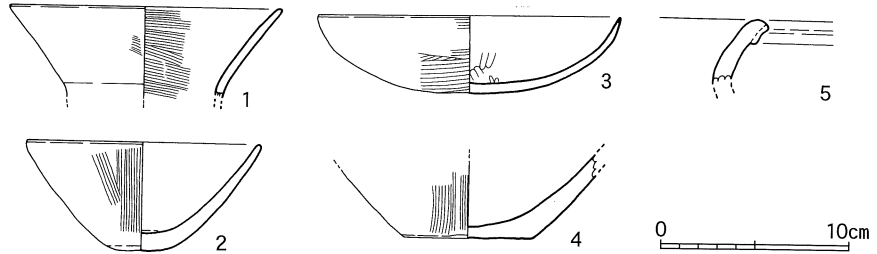
## 2 土坑

### SK01

I区のB-3区に位置する。土坑の規模は東西0.7m、東西0.6m、深さ15cmである。住居跡SH05と切り合い関係有するが、遺構の前後関係は確認できていない。出土遺物には弥生土器や古墳時代前期の土師器、須恵器があり、複数の時期のものが混在している。構築時期を確定できない遺構である。

#### SK01出土遺物 (第39図)

1は土師器の小型丸底壺と推定されるもので、口縁部の破片である。外面にナデ調整、内面に刷毛目調整が認められる。2は小型の鉢で、外面に刷毛目調整、内面にナデ調整



第39図 SK01出土遺物

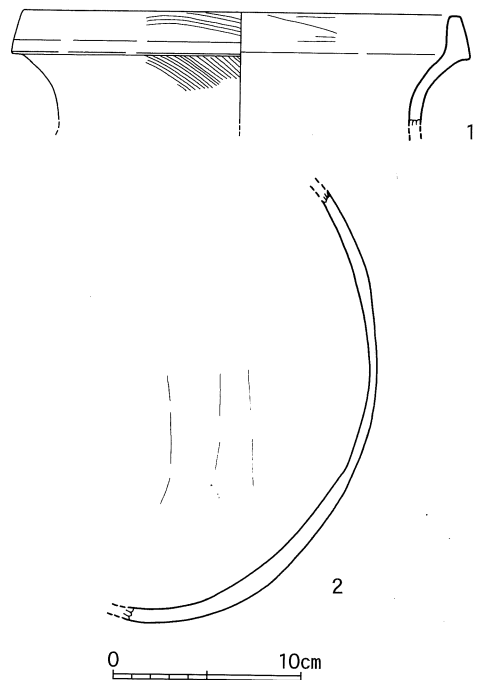
が施されている。3は壺で、器高が低く、外面に刷毛目調整、内面にミガキ調整が認められる。4は甕の底部で、完全な平底となっていることから、弥生土器である可能性が高い。外面に刷毛目調整、内面にナデ調整が施されている。5は須恵器の甕の口縁部と思われる資料である。6世紀代以降の製品であろうか。

### SK02

記録の不備から、遺構の位置に関する情報がなく、平面図などを提示できない。SK02として取り上げられている遺物があり、時期的にもまとまっていることから、古墳時代前期の遺構と推定される。

#### SK02出土遺物 (第40図)

1は土師器の複合口縁壺である。口縁部外面には波状文などの文様はなく、無文であるが、赤色顔料の塗布が認められる。2は土師器の壺の胴部で、残存部の外面に黒班が認められ、内面には削りが施されている。



第40図 SK02出土遺物 (1/4)

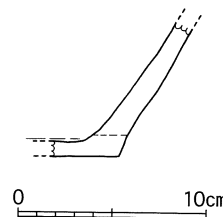
## 3 溝

### SD01

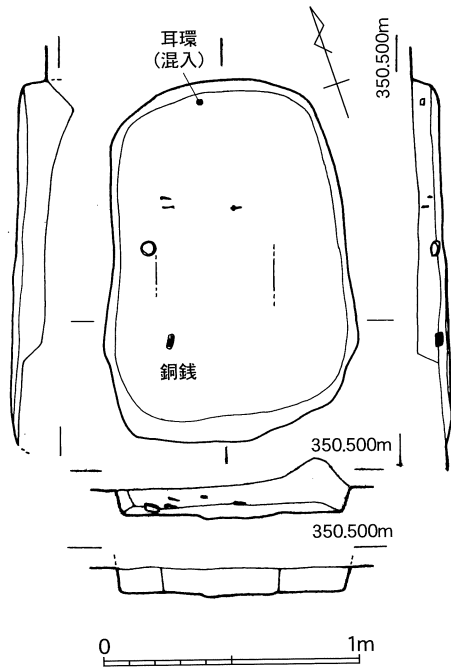
II区北端部A'-1・B-1区に位置し、調査区を東西に横断するような形で検出された。規模は、長さ約6m、幅約1.7~3m、深さ約20cmである。この溝より南側には中世段階の柱穴が密集している。屋敷を区画する溝である可能性もあるが、溝は柱穴群の一部を切って構築されており、柱穴群よりも後出のものであろう。出土遺物は僅少で、詳細な構築時期を確定するものはない。

#### SD01出土遺物 (第41図)

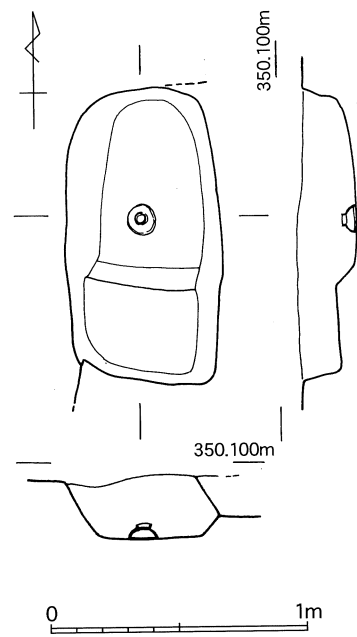
図示した遺物は、備前焼の底部である。中世の所産であり、大甕などの底部と推定される。



第41図 SD01出土遺物 (1/4)



第42図 1号墓実測図 (1/30)



第43図 2号墓実測図 (1/30)

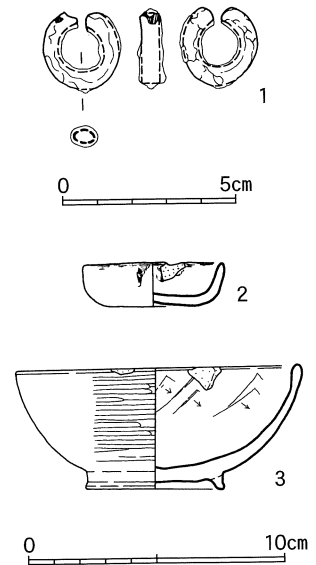
#### 4 墓

##### 1号墓 (第42図)

Ⅱ区のB-5区に位置する。古墳時代前期の住居跡SH05の南東隅付近に構築されており、切り合い関係を有する。墓坑の規模は南北1.4m、東西0.95m、深さ10cmである。遺構埋土や断面の土色、および墓坑内から鉄釘が出土していることから、主体部は幅50cm弱の木棺墓であることが推定される。棺の長さを推定する手がかりは得られなかった。人骨は出土していない。墓坑内からは鉄釘のほか、耳環・緡銭・土師質土器などが出土した。出土位置やレベルから、土師質土器は棺外、緡銭は棺内の副葬品と判断される。また、耳環については古墳時代の所産と考えられるため、混入品であろう。出土した土師質土器の年代観から、遺構の時期は16世紀代と推定される。

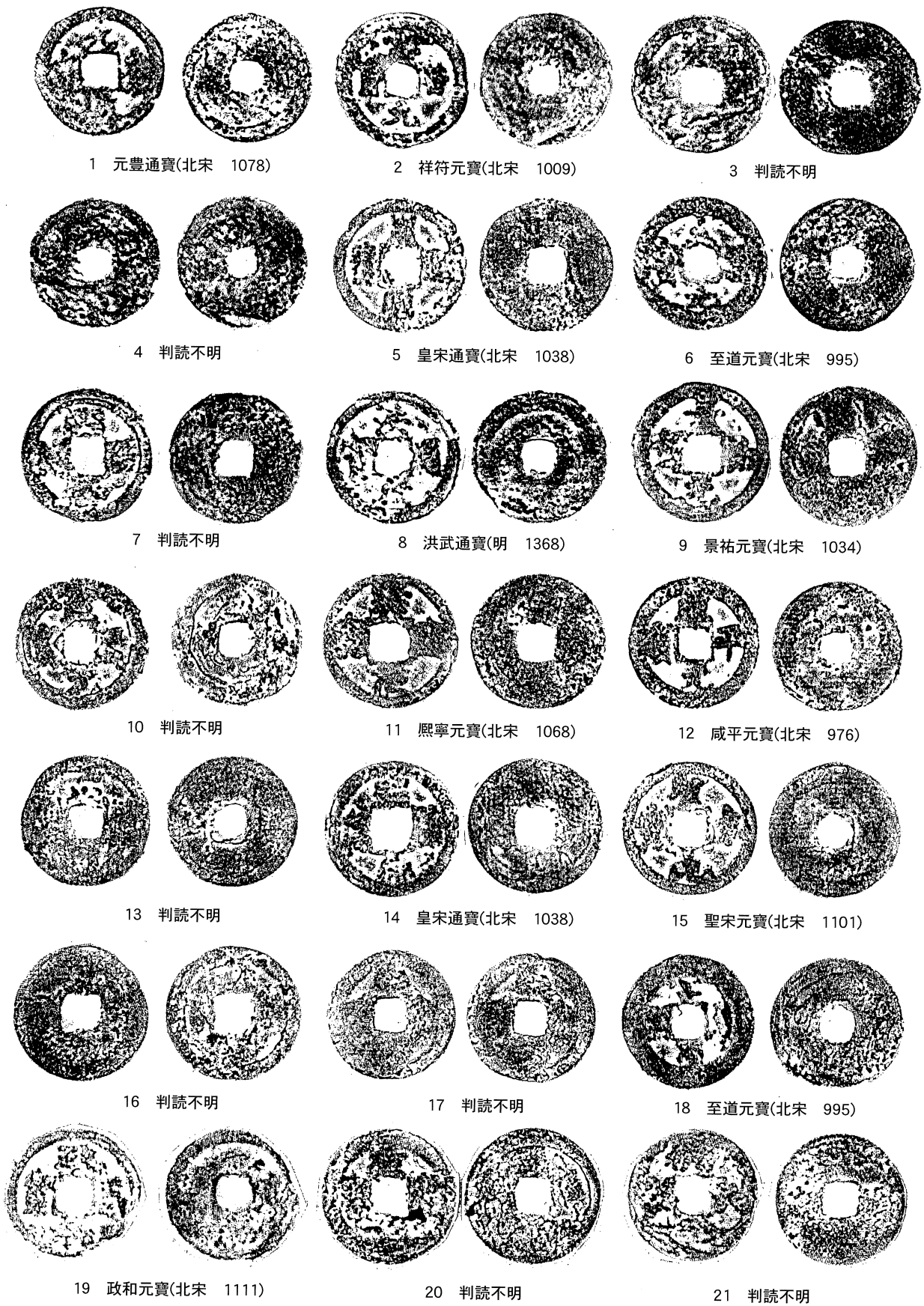
##### 1号墓出土遺物 (第44~47図)

第44図1は金属製の耳環である。地金は銅製で、表面に鍍金がなされていた可能性が考えられるが、断定できない。古墳時代の所産と考えられるため、混入品である。同2は土師質土器の小皿である。灯明皿として使用されており、口縁端部内外面にススが附着する。また、口縁部に意図的な打ち欠きが認められる。京都系土師器を製作する時に特徴的な手捏ね整形の技法によって製作されたもので、近年大分市の大友氏館跡や中世大友府内町跡で出土数が増大している遺物である。製作年代は16世紀代に比定される。第45~47図は1号墓から出土した銅銭の拓影図である。銅銭は緡の状態で出土しており、出土数をカウントしたところ45枚であった。通常、緡銭1本は90~100枚前後の銅銭で構成されるため、およそ半数の銅銭が副葬されていることになる。拓影図は緡の状態であったものを分離して順に提示しているが、最古銭は唐代の「開元通寶」(初鑄造年621年)、最新銭は明代の「洪武通寶」(初鑄造年1368年)である。

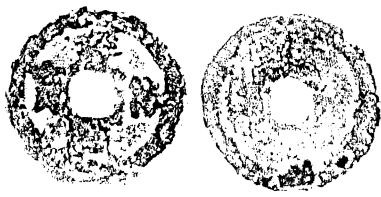


第44図 1号墓, 2号墓  
出土遺物 (1/2, 1/3)

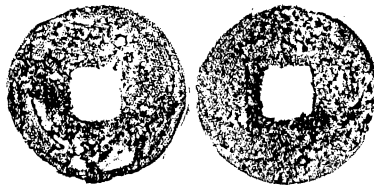




第45図 1号墓出土銅銭① (1/1)



22 祥符元寶(北宋 1009)



23 判読不明



24 祥符通寶(北宋 1009)



25 判読不明



26 大觀通寶(北宋 1107)



27 元祐通寶(北宋 1086)



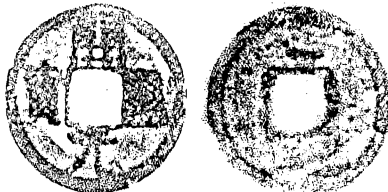
28 判読不明



29 嘉祐通寶(北宋 1056)



30 判読不明



31 開元通寶(唐 621)



32 天聖元寶(北宋 1023)



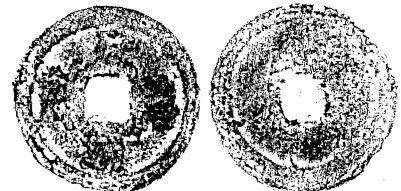
33 熙寧元寶(北宋 1068)



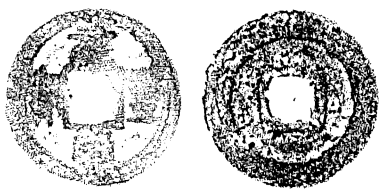
34 判読不明



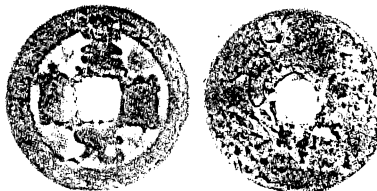
35 元豐通寶(北宋 1078)



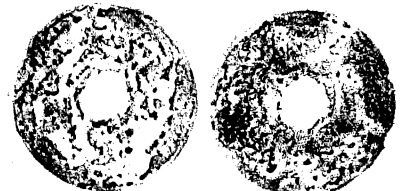
36 判読不明



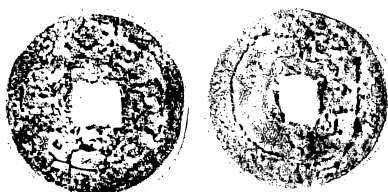
37 元豐通寶(北宋 1078)



38 至道元寶(北宋 995)



39 判読不明



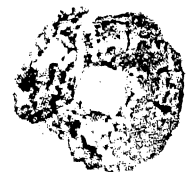
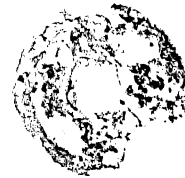
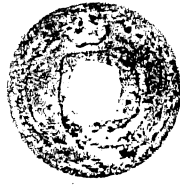
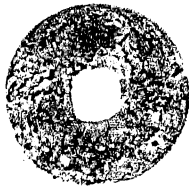
40 判読不明



41 至道元寶(北宋 995)



42 嘉祐通寶(北宋 1056)



43 判読不明

44 判読不明

45 判読不明

第47図 1号墓出土銅銭③ (1/1)

第1表 井尻日焼田遺跡 1号墓出土銅銭一覧表

挿図No.	銭貨名	初鑄造年	国・王朝名	直径 (mm)	重さ (g)	書体	備 考
第45図1	元豊通寶	1078	北宋	2.3	2.7	行書	
第45図2	祥符元寶	1009	北宋	2.3	3.4	真書	
第45図3	判読不明	—	—	2.3	3.5	—	
第45図4	判読不明	—	—	2.3	3.3	—	
第45図5	皇宋通寶	1038	北宋	2.3	2.5	真書	
第45図6	至道元寶	995	北宋	2.4	3.1	草書	
第45図7	判読不明	—	—	2.3	3.8	—	
第45図8	洪武通寶	1368	明	2.3	3.2	真書	
第45図9	景祐元寶	1034	北宋	2.4	3.6	真書	
第45図10	判読不明	—	—	2.3	2.6	真書	「元寶」のみ判読
第45図11	熙寧元寶	1068	北宋	2.4	2.8	篆書	
第45図12	咸平元寶	976	北宋	2.3	3.0	真書	
第45図13	判読不明	—	—	2.3	3.6	—	無文銭か？
第45図14	皇宋通寶	1038	北宋	2.3	2.7	真書	
第45図15	聖宋元寶	1101	北宋	2.3	3.0	行書	
第45図16	判読不明	—	—	2.3	3.2	—	
第45図17	判読不明	—	—	2.3	2.6	—	
第45図18	至道元寶	995	北宋	2.3	3.8	草書	
第45図19	政和元寶	1111	北宋	2.3	2.6	真書	
第45図20	判読不明	—	—	2.3	2.9	—	「寶」のみ判読
第45図21	判読不明	—	—	2.3	3.1	—	
第46図22	祥符元寶	1009	北宋	2.4	3.5	真書	
第46図23	判読不明	—	—	2.3	2.6	—	
第46図24	祥符通寶	1009	北宋	2.4	3.0	真書	
第46図25	判読不明	—	—	2.3	3.3	—	
第46図26	大觀通寶	1107	北宋	2.4	4.5	真書	
第46図27	元祐通寶	1086	北宋	2.4	3.7	真書	
第46図28	判読不明	—	—	2.4	3.4	真書	「元寶」のみ判読
第46図29	嘉祐通寶	1056	北宋	2.3	3.1	真書	
第46図30	判読不明	—	—	2.3	3.4	—	「寶」のみ判読
第46図31	開元通寶	621	唐	2.4	2.0	真書	背上月
第46図32	天聖元寶	1023	北宋	2.3	3.5	真書	
第46図33	熙寧元寶	1068	北宋	2.3	3.7	真書	
第46図34	判読不明	—	—	2.3	3.0	—	
第46図35	元豊通寶	1078	北宋	2.4	3.6	行書	
第46図36	判読不明	—	—	2.4	3.3	—	
第46図37	元豊通寶	1078	北宋	2.3	4.2	篆書	
第46図38	至道元寶	995	北宋	2.4	3.7	真書	
第46図39	判読不明	—	—	2.4	4.8	—	
第46図40	判読不明	—	—	2.4	3.8	—	
第46図41	至道元寶	995	北宋	2.4	3.2	草書	
第46図42	嘉祐通寶	1056	北宋	2.4	2.7	真書	
第47図43	判読不明	—	—	2.4	3.1	—	
第47図44	判読不明	—	—	2.3	3.0	—	
第47図45	判読不明	—	—	2.3	2.7	—	

## 2号墓 (第43図)

Ⅱ区のB-3区に位置する。古墳時代中期の住居跡SH13の南西隅付近に構築されており、切り合い関係を有する。墓坑の規模は南北1.15m、東西0.6m、深さ25cmである。遺構床面は2段掘りになっており、主体部を推定する手がかりは得られていない。人骨も出土しなかった。墓坑床面中央付近から、瓦質土器塊が出土している。遺構の構築時期は16世紀代に比定される。

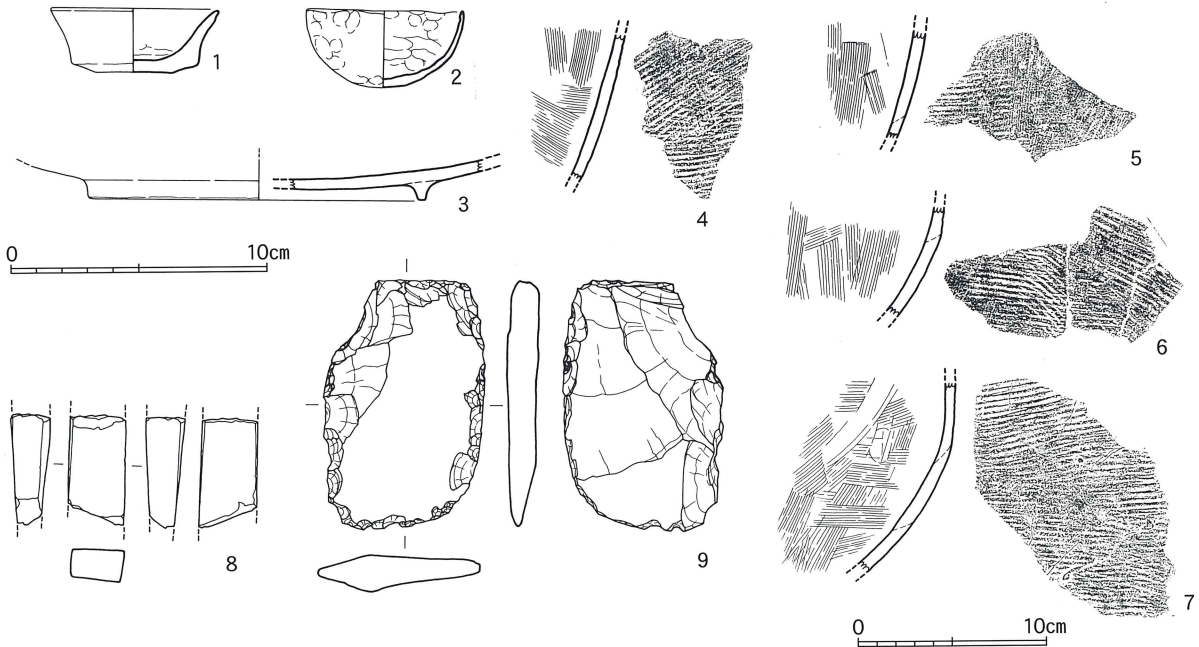
## 2号墓出土遺物 (第44図)

第44図3は瓦質土器塊である。高台付きで、内面に削り調整、内面にミガキ調整が行われている。当該遺物も大分市の大友氏館跡や中世大友府内町跡で出土数が増大しているもので、16世紀代の所産である。

## 5 柱穴出土遺物 (第48図)

柱穴から出土した遺物を第48図で提示した。柱穴はⅡ区で多数が検出されており、その大半が中世の所産と推定される。柱穴には古墳時代の遺物のみを出土するものもあるようであるが、当該遺構が古墳時代に遡るものなのか、中世に降る遺構なのかを判断できない。

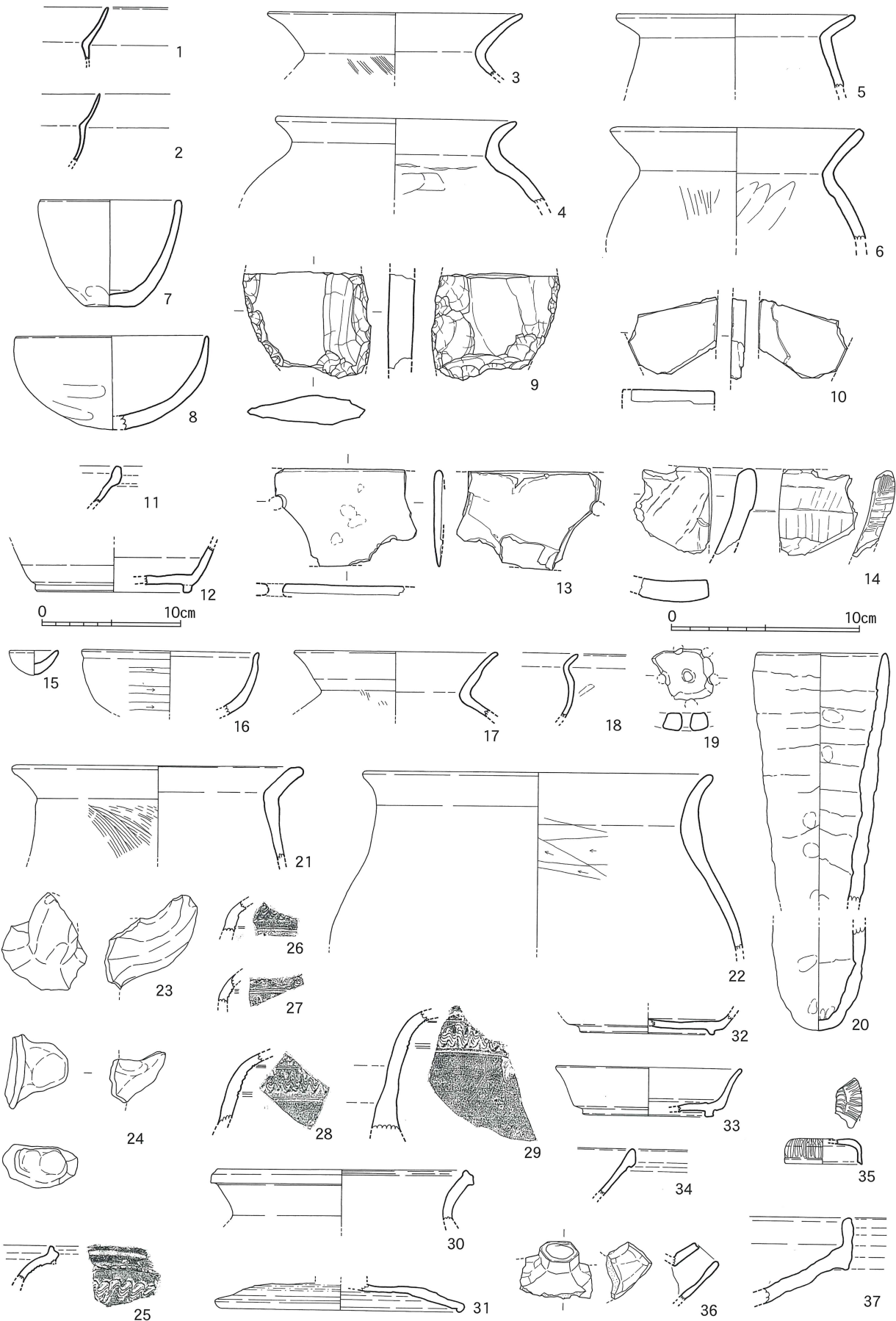
1はⅡ区SP278から出土した土師器で、高坏の坏部と推定される。脚部は欠損し、古墳時代中期以降の所産であろう。2はⅡ区SP19から出土した小型の土師器坏で、内外面に指頭痕が認められる。古墳時代の所産と思われるが、詳細な時期は確定できない。3はⅡ区SP209から出土した土師質土器鉢の底部で、高台が付く部位の破片である。4～7はⅡ区SP19から出土した土師器甕で、外面に叩き調整、内面に刷毛目調整が施されている。古墳時代前期に比定される。8はⅡ区SP224から出土した砥石で、古墳時代前期の所産と推定されるが、断定できない。9はⅡ区SP384から出土した打製石器で、縄文時代の所産と推定される。



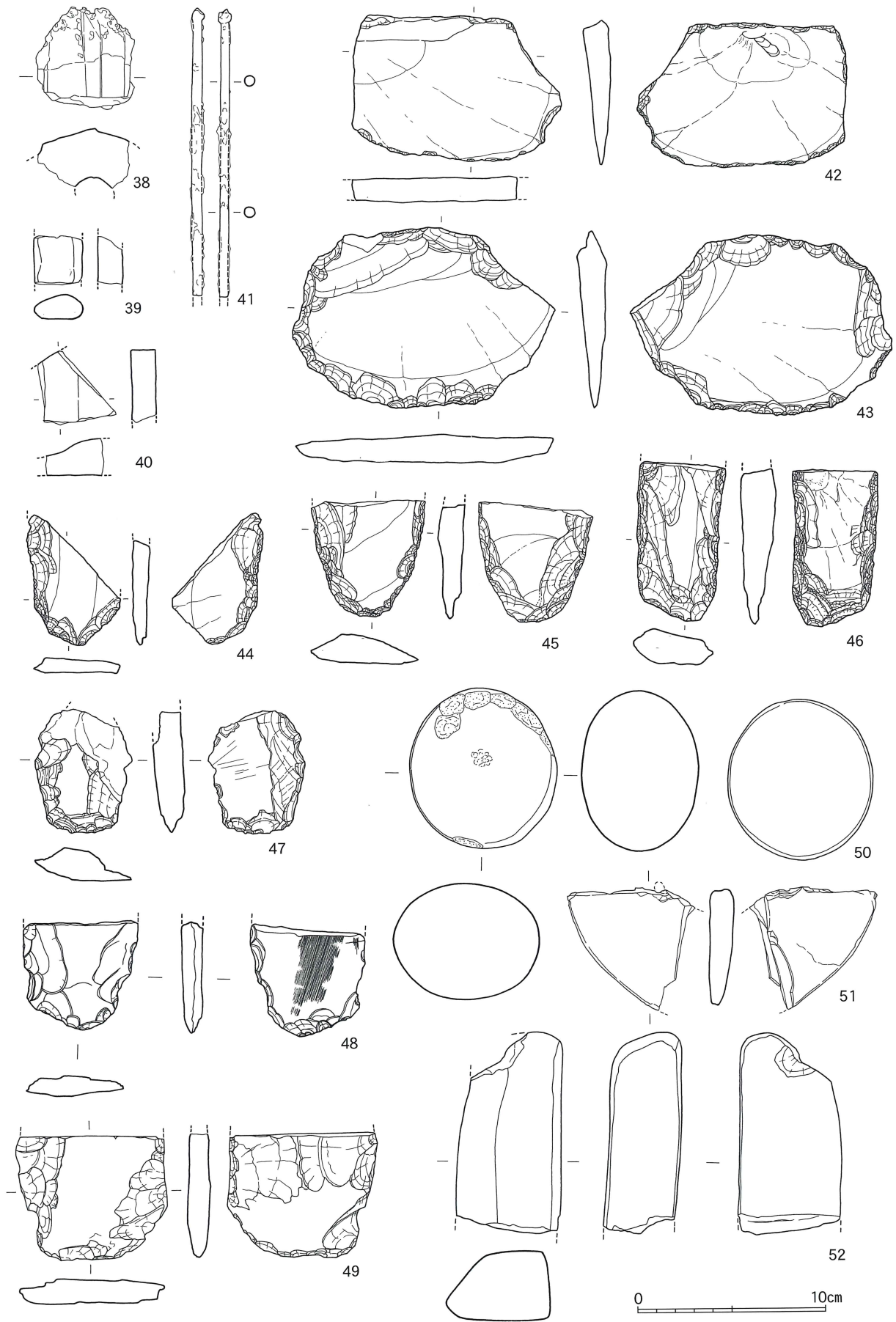
第48図 柱穴出土遺物 (1/4, 1/3)

## 6 遺構外の遺物 (第49～51図)

遺構に直接帰属しない遺物を下記で報告する。第49図1～14はⅠ区、同15～37および第50図38～52はⅡ区、第51図53・54は地区不明の遺物である。詳しい出土位置などについての情報は、巻末の遺物一覧表を参照されたい。



第49図 遺構外の遺物① (1/4, 1/3)



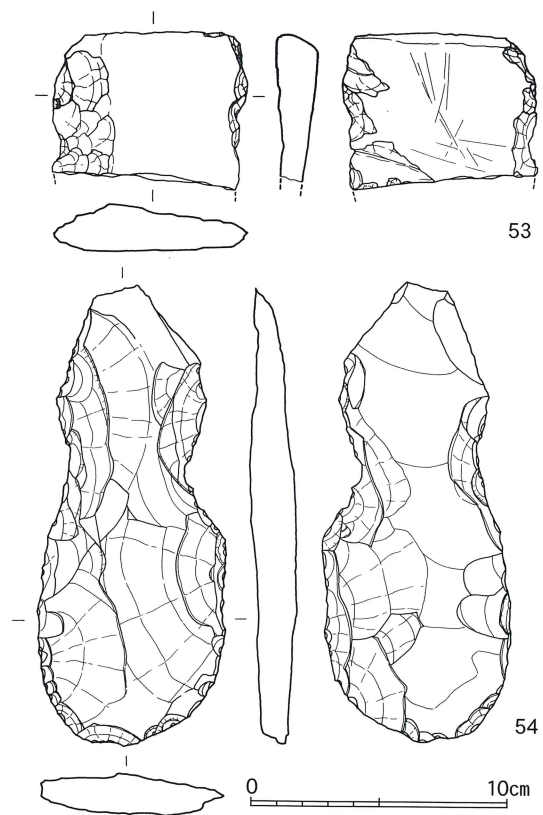
第50図 遺構外の遺物② (1/3)

第49図1・2は土師器の小型丸底壺である。内外面が風化しており、調整が不明である。器壁が薄く、搬入品である可能性も考えられる。3～6は土師器の甕で、古墳時代前期の所産である。7は鉢で、底部は平底を呈するが、不安定なものとなる。8は鉢で、内外面にナデ調整を施す。古墳時代中期頃の所産であろうか。9は扁平打製石器で、縄文時代の所産であろう。10は砥石である。11は中国産白磁碗で、口縁部の破片である。口縁部が玉縁を呈し、11～12世紀代の所産である。12は須恵器の高台付き壺で、9世紀代の所産であろう。13は石庖丁で、残存部の1箇所貫通孔が認められる。弥生時代の所産である。14は滑石製石鍋の破片で、割口などに再研磨が行われるなどの二次加工がなされている。

15はミニチュア土器で、内外面にナデを施す。詳細な時期は不明。16は土師器の壺で、口縁端部がわずかに外側に屈曲する。内外面に丹塗りが施されている。古墳時代中期（5世紀代）の所産である可能性が高い。17は甕で、頸部がすぼまる形態を呈する。古墳時代前期の所産であろう。18は土師器の鉢で、口縁部が「く」字状に屈曲する小型の土器である。内外面に丹塗りを施している。19は小片で器種不明であるが、多孔式の甑の底部である可能性がある。残存部分に少なくとも3箇所の貫通孔が認められる。20は土師器の焼塩壺であり、注目される資料である。口縁部から底部までが残存し、同一個体と思われるが、口縁部から胴部と底部付近の大型破片は接点がなく、接合しない。塩を運搬するのに使用する容器を兼ねた焼塩用の壺と推定される。通常、この種の焼塩壺は「六連鳥式」といわれるものが多いが、六連鳥式の焼塩壺の内面には布目痕が認められるのに対し、当該資料には内面に布目痕がなく、ナデ調整が施されている。井尻日焼田遺跡は山間部に立地するため、海岸部との交易を物語る良好な資料であるが、残念ながら帰属遺構や伴同遺物が明らかではない。9世紀代前後の所産と思われる。21は土師器の甕で、外面に刷毛目調整が認められ、内面には削りを施さない。口縁断面の形態などから、「企救型甕」と呼ばれる型式に属する資料である。9世紀代の所産。22は土師器の甕で、外面にナデ調整、内面に削り調整が施されている。23・24は土師器甑の把手で、古墳時代中期以降の所産であろう。25は須恵器で甑の口縁部であろう。外面に櫛描き波状文が描かれている。26～29は須恵器甑の口縁部と思われ、外面に沈線や櫛描き波状文が認められる。30は須恵器壺の口縁部である。31は須恵器壺の蓋で、天井部にツマミが剥落した痕跡が残る。32・33は須恵器の壺で、33は全形が復元できる資料であるが、32は高台部付近の破片である。34は中国産の白磁碗で、口縁部の破片である。口縁部が玉縁を呈し、11～12世紀代の所産である。35は中国産の青白磁合子の蓋で、型打ちによる文様を打ち出している。製作年代は12～13世紀代であろう。36は土師質土器鍋で、把手基部の部位である。木製の把手を装着するために、粘土を巻いて貫通孔を設けている。

第50図38は土製のフイゴ羽口で、先端部は熱変している。39・40は砥石である。41は鉄器で、棒状を呈する製品であるが、時期・用途などは不明。42～49は縄文時代の所産と思われる打製石器である。50は磨石、51は石庖丁、52は叩石である。

第51図53は縄文時代の打製石器で、調査区周辺からの表採品である。54も打製石器でSH11（欠番の遺構）からの出土とされているが、詳細な出土地点が不明のため、ここに提示した。柄を装着するため、側縁の2箇所を打ち欠いている。



第51図 遺構外の遺物③

## 第4章 総括

今回の井尻日焼田遺跡の発掘調査で出土した遺物は、縄文時代(?)から中世までの長期間に及び、また検出された遺構としては、弥生時代から古墳時代の住居跡15基、土坑2基、中世以降の所産である溝1条、戦国時代(16世紀)の墓2基、柱穴多数がある(第2表参照)。遺跡は低位段丘上に位置しており、西側に河川(松木川)、東側に山裾が迫り、遺跡立地としてはそれほど広範囲に広がるとは思えないものの、出土遺物の中には鏡片などの注目に値するものもあり、当地域における中規模以上の集落遺跡である可能性が考えられる。

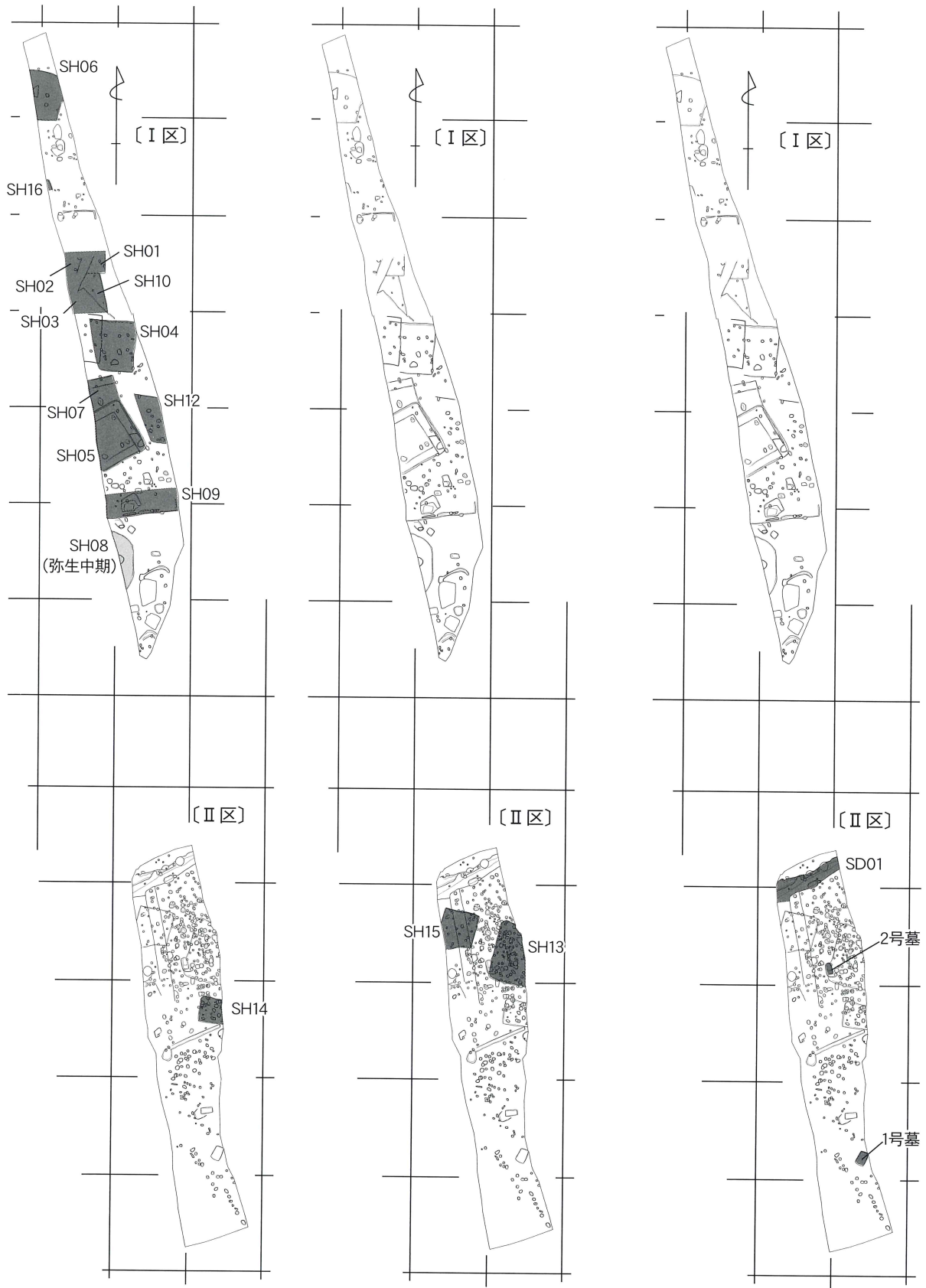
以下、時期ごとに遺構・遺物のまとめを行い、総括に代えたい(第52図参照)。

先ず、縄文時代について。当該時期の遺構は検出されておらず、古墳時代の住居跡や遺構外から打製石器が一定量出土している。当該遺物は従来縄文時代後晩期以降の所産と考えられてきたものであるが、井尻日焼田遺跡からは縄文土器は小片に至るまで一片も出土していない。石器のみが一定量出土し、土器が一片も出土しないことは不自然であり、このため実は打製石器は縄文時代の遺物ではなく、時期の降る古墳時代以降の所産ではないかとの憶測も成り立つ。特に、住居跡SH06の床面近くから2個体並んで出土した事例(第18図11・12)やSH07で土師器壺の破片と完全に混在して出土した事例(第20図10)をみると、この感を強くする。打製石器が縄文時代の遺物であるのか、それ以降の所産であるのかを結論づけるのは、今回は保留しておきたいが、今後注意を払っておきたい事象である。

第2表 井尻日焼田遺跡主要遺構一覧表

遺構名	遺構の性格	位置	規模	主な出土遺物	時期	掲載頁
SH01	住居跡	I区 A-1	東西1.9m/南北2.3m/深さ24cm		古墳時代前期	5
SH02	住居跡	I区 A-1	東西-/南北4.5m/深さ24cm	杓子形土器	古墳時代前期	10
SH03	住居跡	I区 A-1	東西4.6m/南北4.5m/深さ4cm	石庖丁(混入)	古墳時代前期	11
SH04	住居跡	I区 A-2、B-2	東西4.8m/南北5.1m/深さ9cm		古墳時代前期	12
SH05	住居跡	I区 A-2・3、B-2・3	東西5.3m/南北5.9m/深さ25cm		古墳時代前期	16
SH06	住居跡	I区 C-1、A'-2	東西4.0m/南北5.0m/深さ9cm		古墳時代前期	18
SH07	住居跡	I区 A-2、B-2	東西-/南北-/深さ-		古墳時代前期	20
SH08	住居跡	I区 A-4、B-4	径7m/深さ10cm		弥生時代中期?	22
SH09	住居跡	I区 B-3、B-4	東西7.2m/南北-/深さ30cm	石庖丁(混入)	古墳時代前期	22
SH10	住居跡	I区 A-1	東西4.1m/南北-/深さ9cm		古墳時代前期	26
SH11	-	(欠番)	-	-	-	-
SH12	住居跡	I区 B-2、B-3	東西3.1m/南北-/深さ8cm		古墳時代前期	27
SH13	住居跡	II区 B-2	東西3.1m/南北6.0m/深さ9cm		古墳時代中期	28
SH14	住居跡	II区 B-3	東西2.5m/南北2.5m/深さ15cm	石庖丁(混入)	古墳時代前期	31
SH15	住居跡	II区 A-2	東西3.6m/南北3.7m/深さ10cm		古墳時代中期	32
SH16	住居跡	I区 A'-1	-	鏡片(破鏡)	古墳時代前期	33
SK01	土坑	I区 B-3	東西0.7m/南北0.6m/深さ15cm		不明	34
SK02	土坑	-	-		古墳時代前期	34
SD01	溝	II区 A'-1、B-1	長さ6m/幅1.7~3m/深さ20cm		不明	34
1号墓	墓	II区 B-5	東西0.95m/南北1.4m/深さ10cm	耳環(混入)・銅銭・土師質土器小皿	中世(16世紀)	35
2号墓	墓	II区 B-3	東西0.6m/南北1.15m/深さ25cm	瓦質土器壺	中世(16世紀)	39



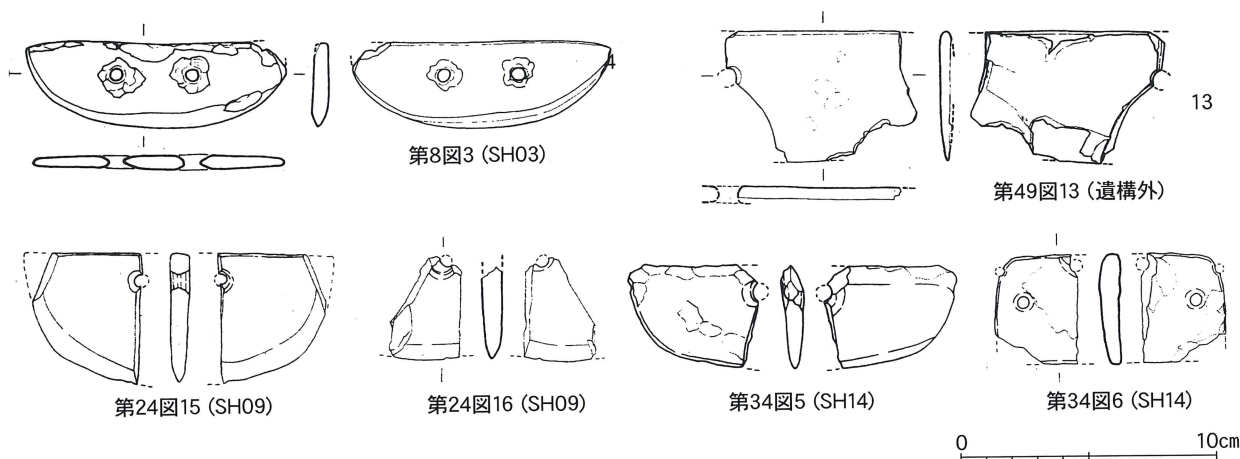


古墳時代前期

古墳時代中期

中世・近世

第52図 遺構の変遷 (1/600)



第53図 井尻日焼田遺跡出土の石庖丁 (1/3)

弥生時代の遺構については、中期と推定される住居跡1棟 (SH08) がある。とはいえ、当該遺構についても良好な出土遺物がなく、住居跡の平面プランを年代推定の主な根拠にしている。

弥生時代の遺物に関して、土器類については平底の甕や壺などが古墳時代前期の遺物と混在して、少量認められる程度である。石器類については石庖丁が6個体出土しており、注目される (第53図)。この量は決して多いとは言えないが、石庖丁が多量に出土する日田・玖珠地域と同様な出土傾向を示すものとして注目しておきたい。石庖丁の素材となる石材は結晶片岩など地元で産出するものが多く、立岩産の輝緑凝灰岩製のものは認められないようである。なお、石庖丁も古墳時代前期の住居跡や遺構外からの出土が多く、弥生時代の遺構に伴って出土したものは皆無である。そのため、その詳細な時期についても、確定することができていない。

古墳時代前期は、井尻日焼田遺跡の最盛期と思われる時期である。遺構は住居跡が主体で、I区で12基、II区で1基の総計13基を数える。見かけの上では、当該時期の遺構がI区に片寄って構築されているように見えるが、これが実態であるかどうかは調査区の制限のため、断定できない。出土土器には小型丸底壺や茶白山型の二重口緑壺など、布留式系統のものが多く、遺物の上からはほとんどの遺構が同一の時期に比定できる。SH02では祭祀道具として使用された可能性が高い杓子形土製品 (第6図1)<sup>(1)</sup> が出土しており、当該時期の所産と推定されるが、良好な共伴遺物がない。また、遺構の残存状況が不良ではあるが、SH16からは後漢代の内行花文鏡 (連弧文鏡) が鏡片 (破鏡) (第38図) の状態で出土している。SH16出土の鏡片は破断面を丁寧に再研磨した「破鏡」であるが、丹塗りの痕跡などは認められないようである。「破鏡」は豊後地域の弥生時代後期末から古墳時代前期の集落跡で散見される遺物であるが、地域の拠点集落もしくは中規模程度以上の集落跡で発見されることが多い。現状の九重町地域の調査事例の中では、井尻日焼田遺跡が初出のものとなる。井尻日焼田遺跡の当該時期の集落は、現状での調査初見による限り、古墳時代前期の短い期間で一端終焉を迎える可能性が高い。

古墳時代中期には、2基の住居跡が検出されている。出土遺物の様相からみると、住居跡の時期は5世紀後半代に比定される。古墳時代前期の遺構群とは150年程度の開きがあり、継続性は認められない。当該時期の集落の展開は、調査区の制限により不明であるが、小規模なものであった可能性が考えられる。

古代 (8~9世紀) では、遺構の検出はないが、注目すべき遺物が認められる。第49図20で示した土師器の焼塩壺がそれで、1個体のみであるが、塩の運搬容器を兼ねた焼塩用の壺である。井尻日焼田遺跡は山間部に位置する遺跡であるため、この焼塩壺が塩生産に使用されたものでないことは明白で、海岸部から交易によって塩が運ばれたことを物語る重要な資料である。通常、この種の焼塩壺には「六連島式」と呼称されるものが多く、六連島式の焼塩壺には内面に布目圧痕が認められる。それに対して、本例では内面に布目が認められず、ナデ調整のみが施されている。大分県内では、井尻日焼田遺跡と同様な特徴をもつ土師器の焼塩壺が中津市 (旧山国町)

の大勢遺跡<sup>(2)</sup>で、六連島式の焼塩壺と共伴して一定量出土している(第54図)。大勢遺跡は山国川の段丘上に立地する遺跡で、この遺跡の場合、山国川の水運を利用した交易によって、海岸部の集落から塩を入手した可能性が高い。この事例を重視すると、周防灘沿岸付近の集落で入手された塩(焼塩壺)が山国川を遡り、現在の耶馬溪付近から進路を替え、陸路または川による水運によって玖珠・九重地域にもたらされた可能性を考えることができようか。現状では資料不足の感は否めず、大胆な予測であることは承知の上であるが、ひとつの仮説として提示しておきたい。

中世では2基の墓と多数の柱穴群が検出されている。また、I区とII区の境界付近に位置する溝SD01についても近世に降る可能性もあるが、備前焼が出土していることから、当該時期の遺構である可能性も考えられる。柱穴群は溝SD01より南のII区で多数検出されており、出土遺物から2基の墓とも併行する時期に位置づけられる。そうすると、柱穴群と同時期である墓は「屋敷墓」としての性格をもつ遺構と考えられる。仮に、墓と柱穴群、溝がほぼ同時期の遺構で、相互に関連するものであるとするならば、発掘調査地点付

近が中世の屋敷である可能性が浮かびあがってくる。調査区周辺の地名調査など、さらなる検討が必要になるが、今回は当該の調査を実施していない。今後の課題である。なお、1号墓から出土した土師質土器の小皿は、京都系土師器の系統である手捏ね整形で製作された製品であり、2号墓出土の瓦質土器塊は、高台付きの形態を呈する在地色の強い製品である。両者とも近年発掘調査が進行している大分市の中世大友府内町跡で出土事例が増大している資料で、その年代は戦国末期の16世紀後半代に比定され、戦国大名大友宗麟が存命する時期に相当する。井尻日焼田遺跡の中世屋敷の時期は16世紀後半代の比較的に短期間のものである可能性も考えられる。

以上、井尻日焼田遺跡のまとめを行った。未解決の課題も多いが、とりあえず現時点での総括としておきたい。

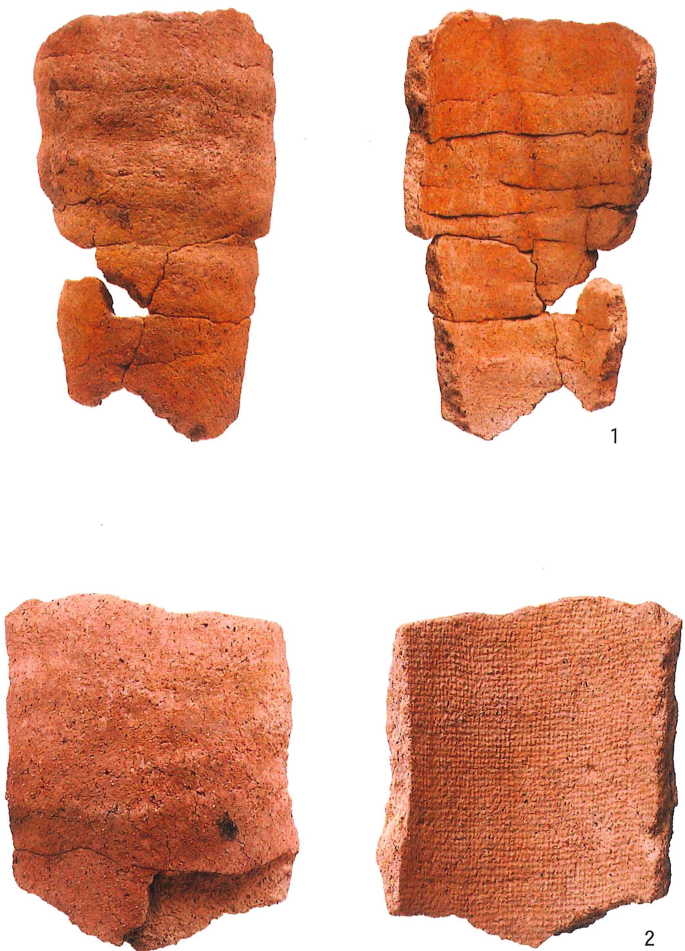
註(1) なお、杓子形土器は平成15年度(2003年度)に発掘調査を実施した九重町教育委員会の調査区でも出土例がある。

(九重町教育委員会竹野孝一郎氏のご教示による。)

また近年、南九州地域で出土した杓子形土器を中村直子氏がまとめている。

中村直子「南九州における木製品模倣土器について」(『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』2009年)

(2) 中津市教育委員会『大勢遺跡』中津市文化財調査報告第49集(2010年)



第54図 中津市大勢遺跡出土焼塩壺  
(註2文献より引用)

1の内面には布目が認められない。

2の内面には布目が認められる(六連島式)。

第2表 井尻日焼田遺跡出土遺物一覧表（土器・陶磁器①）

挿図番号	遺構名	種別	器種	時期	法量(cm) ( )は復元径			備考
					口径	底径	器高	
第5図1	SH01	土師器	壺	古墳時代前期	—	—	—	
第6図1	SH02	ひさご形土製品	土製品	古墳時代前期	5.0	—	3.4	
第6図2	SH02	土師器	高坏	古墳時代前期	—	(12.0)	—	
第8図1	SH03	土師器	碗	古墳時代前期	10.2	—	5.0	
第8図2	SH03	土師器	高坏	古墳時代前期	(17.8)	—	—	
第8図3	SH03	土師器	高坏	古墳時代前期	—	12.4	—	
第10図1	SH04	土師器	小型丸底壺	古墳時代前期	—	—	—	
第10図2	SH04	土師器	小型丸底壺	古墳時代前期	(10.0)	—	—	
第10図3	SH04	土師器	小型丸底壺	古墳時代前期	(11.9)	—	—	
第10図4	SH04	土師器	小型丸底壺	古墳時代前期	—	—	—	
第10図5	SH04	土師器	鉢	古墳時代前期	(16.1)	—	—	
第10図6	SH04	土師器	鉢	古墳時代前期	(9.8)	—	2.7	
第10図7	SH04	土師器	鉢	古墳時代前期	(9.0)	—	3.2	
第10図8	SH04	土師器	鉢	古墳時代前期	(14.1)	—	—	
第10図9	SH04	土師器	鉢	古墳時代前期	(17.8)	—	5.4	
第10図10	SH04	土師器	鉢	古墳時代前期	18.2	—	8.9	
第10図11	SH04	土師器	壺	古墳時代前期	(9.9)	—	—	
第10図12	SH04	土師器	小型器台	古墳時代前期	—	(11.1)	—	
第10図13	SH04	土師器	壺	古墳時代前期	(17.0)	—	—	
第10図14	SH04	土師器	壺	古墳時代前期	(21.9)	—	—	
第10図15	SH04	土師器	甕	古墳時代前期	(17.2)	6.1	—	
第10図16	SH04	土師器	甕	古墳時代前期	(18.0)	—	—	
第10図17	SH04	土師器	甕	古墳時代前期	—	(3.4)	—	
第10図18	SH04	土師器	壺	古墳時代前期	—	—	—	
第10図19	SH04	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第10図20	SH04	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第10図21	SH04	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第14図1	SH05	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第14図2	SH05	土師器	壺	古墳時代前期	—	—	—	
第14図3	SH05	土師器	甕	古墳時代前期	(13.4)	—	—	
第14図4	SH05	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第14図5	SH05	土師器	甕	古墳時代前期	16.8	—	—	
第14図6	SH05	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第14図7	SH05	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第14図8	SH05	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第14図9	SH05	土師器	碗	古墳時代前期	10.2	—	3.7	
第14図10	SH05	土師器	鉢	古墳時代前期	—	—	—	
第14図11	SH05	土師器	小型鉢	古墳時代前期	9.8	—	10.3	
第14図12	SH05	土師器	高台付鉢	古墳時代前期	10.9	2.6	10.1	
第14図13	SH05	土師器	高坏	古墳時代前期	—	(17.2)	—	
第14図14	SH05	土師器	高坏	古墳時代前期	17.9	13.4	13.7	
第14図15	SH05	土師器	高坏	古墳時代前期	20.5	—	—	
第14図16	SH05	土師器	高坏	古墳時代前期	25.2	16.0	17.0	
第16図1	SH06	土師器	坏	古墳時代前期	(9.6)	—	2.9	
第16図2	SH06	土師器	高坏	古墳時代前期	(19.6)	—	—	
第20図1	SH07	土師器	甕	古墳時代前期	(17.0)	—	—	
第20図2	SH07	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第20図3	SH07	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第20図4	SH07	土師器	複合口縁壺	古墳時代前期	(16.6)	—	—	SH5と接合
第22図1	SH08	土師器	甕	弥生時代中期?	—	3.9	—	
第22図2	SH08	土師器	甕	弥生時代中期?	—	4.2	—	
第22図3	SH08	土師器	甕	弥生時代中期?	—	—	—	
第24図1	SH09	土師器	壺	古墳時代前期	(10.2)	—	—	
第24図2	SH09	土師器	壺	古墳時代前期	—	—	—	
第24図3	SH09	土師器	二重口縁壺	古墳時代前期	—	—	—	
第24図4	SH09	土師器	壺	古墳時代前期	(11.8)	—	—	
第24図5	SH09	土師器	鉢	古墳時代前期	12.9	6.0	6.6	
第24図6	SH09	弥生土器	甕	古墳時代前期	14.8	(6.2)	18.1	
第24図7	SH09	土師器	壺	古墳時代前期	—	—	—	
第24図8	SH09	土師器	高坏	古墳時代前期	(16.0)	(11.2)	12.4	
第24図9	SH09	土師器	高坏	古墳時代前期	—	—	—	
第24図10	SH09	土師器	二重口縁壺	古墳時代前期	19.5	—	—	
第24図11	SH09	土師器	鉢	古墳時代前期	(8.8)	—	—	内外面に赤色顔料
第24図12	SH09	土師器	小型丸底壺	古墳時代前期	(12.2)	—	—	
第24図13	SH09	土師器	把手	古墳時代前期	—	—	—	

第3表 井尻日焼田遺跡出土遺物一覧表（土器・陶磁器②）

挿図番号	遺構名	種別	器種	時期	法量(cm) ( )は復元径			備考
					口径	底径	器高	
第29図1	SH12	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第29図2	SH12	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第29図3	SH12	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第29図4	SH12	土師器	甕	古墳時代前期	(14.4)	—	—	
第29図5	SH12	土師器	甕	古墳時代前期	(15.0)	—	—	
第31図1	SH13	須恵器	坏	古墳時代前期	12.6	—	5.7	
第31図2	SH13	須恵器	壺	古墳時代前期	(7.5)	—	—	
第31図3	SH13	土師器	坏	古墳時代前期	(11.9)	—	4.3	内面に赤色顔料
第31図4	SH13	土師器	坏	古墳時代前期	(11.8)	—	—	
第31図5	SH13	土師器	高坏	古墳時代前期	—	—	—	
第31図6	SH13	土師器	高坏	古墳時代前期	(15.7)	—	—	
第31図7	SH13	土師器	甗(把手)	古墳時代前期	—	—	—	
第31図8	SH13	土師器	壺	古墳時代前期	(10.3)	—	—	
第31図9	SH13	土師器	甕	古墳時代前期	(15.1)	—	—	
第31図10	SH13	土師器	甕	古墳時代前期	(15.1)	—	—	
第31図11	SH13	土師器	甕	古墳時代前期	(19.9)	—	—	
第31図12	SH13	土師器	甕	古墳時代前期	(24.8)	—	—	
第34図1	SH14	須恵器	碗	8~9世紀	(16.5)	(11.1)	6.1	
第34図2	SH14	土師器	器台	古墳時代前期	(8.7)	—	—	
第34図3	SH14	土師器	壺	古墳時代前期	—	—	—	
第34図4	SH14	土師器	フイゴ羽口	中世	—	—	—	
第36図1	SH15	土師器	碗	古墳時代前期	(12.6)	—	4.5	内外面に赤色顔料
第36図2	SH15	土師器	碗	古墳時代前期	(11.9)	—	5.0	内外面に赤色顔料
第36図3	SH15	土師器	碗	古墳時代前期	13.4	—	4.5	内外面に赤色顔料
第36図4	SH15	土師器	碗	古墳時代前期	(13.1)	—	4.9	
第36図5	SH15	土師器	ミニチュア土器	古墳時代前期	2.7	—	1.7	
第36図6	SH15	土師器	甕	古墳時代前期	12.7	—	—	
第36図7	SH15	土師器	甕	古墳時代前期	(19.1)	—	—	
第39図1	SK01	土師器	坏	古墳時代前期	(16.0)	—	4.1	
第39図2	SK01	弥生土器	甕	弥生時代後期	—	(6.8)	—	
第39図3	SK01	土師器	坏	古墳時代前期	(12.4)	—	5.7	
第39図4	SK01	土師器	高坏	古墳時代前期	(14.4)	—	—	
第39図5	SK01	須恵器	壺	古墳時代	—	—	—	
第40図1	SK02	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	22.7+α	
第40図2	SK02	土師器	壺	古墳時代前期	(23.2)	—	5.85	
第41図	SD01	陶器	壺	中世	—	—	—	備前焼
第44図2	1号墓	土師質土器	皿	16世紀	5.4	—	1.7	
第44図3	2号墓	瓦質土器	碗	16世紀	11.8	5.4	4.9	
第48図1	P19	土師器	碗	古墳時代前期	(8.4)	—	3.9	
第48図2	P19	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第48図3	P19	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第48図4	P19	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第48図5	P19	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第48図6	P209	土師質土器	鉢	16世紀	—	(18.0)	—	
第48図7	PT278	土師器	坏	古墳時代前期	(8.9)	(6.7)	3.3	
第49図1	遺構外	土師器	小型丸底壺	古墳時代前期	—	—	—	
第49図2	遺構外	土師器	小型丸底壺	古墳時代前期	—	—	—	
第49図3	遺構外	土師器	甕	古墳時代前期	(18.4)	—	—	
第49図4	遺構外	土師器	甕	古墳時代前期	(17.2)	—	—	
第49図5	遺構外	土師器	甕	古墳時代前期	(16.6)	—	—	
第49図6	遺構外	土師器	甕	古墳時代前期	(17.7)	—	—	
第49図7	遺構外	土師質土器	鉢	古墳時代前期	(9.4)	(3.4)	7.6	
第49図8	遺構外	土師器	碗	古墳時代前期	(13.8)	—	6.8	
第49図11	遺構外	白磁	碗	中世(11~12世紀)	—	—	—	
第49図12	遺構外	須恵器	?	古墳時代前期	—	(11.0)	—	
第49図15	遺構外	ミニチュア土器	?	古墳時代前期	3.4	—	1.8	
第49図16	遺構外	?	坏	古墳時代前期	—	—	—	丹塗り
第49図17	遺構外	土師器	甕	古墳時代前期	—	—	—	
第49図18	遺構外	土師器	鉢	古墳時代前期	—	—	—	丹塗り
第49図19	遺構外	土師器	甗	古墳時代前期	—	—	—	
第49図20	遺構外	土師器	焼塩壺	古代(8~9世紀)	(9.2)	—	—	
第49図21	遺構外	土師器	甕	古代(8~9世紀)	—	—	—	企救型甕
第49図22	遺構外	土師器	甕	古墳時代	—	—	—	
第49図23	遺構外	土師器	甗	古墳時代	—	—	—	

第4表 井尻日焼田遺跡出土遺物一覧表(石器①)

挿図番号	遺構名	種類	材質	時期	法量 (cm)						備考	
					長さ	幅	厚さ	重量				
第5図2	SH01	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	14.8	幅	13.0	厚さ	5.5	2kg	
第6図2	SH02	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	13.3	幅	11.5	厚さ	6.6	1kg	
第6図3	SH02	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	13.2	幅	10.1	厚さ	7.2	1.5kg	
第6図4	SH02	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	13.6	幅	11.7	厚さ	7.0	2kg	
第6図5	SH02	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	16.3	幅	8.3	厚さ	5.7	1kg	
第6図6	SH02	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	15.0	幅	15.0	厚さ	7.3	1.6kg	
第6図7	SH02	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	20.0	幅	22.3	厚さ	10.6	8kg	
第8図4	SH03	石庖丁	結晶片岩	弥生時代?	長さ	3.3	幅	10.2	厚さ	0.6	35g	混入?
第10図22	SH04	砥石	安山岩	古墳時代前期	長さ	15.0	幅	8.0	厚さ	8.7	1.6kg	
第10図23	SH04	砥石	安山岩	古墳時代前期	長さ	8.8	幅	4.1	厚さ	3.7	200g	
第10図24	SH04	砥石	安山岩	古墳時代前期	長さ	9.0	幅	6.3	厚さ	1.9	129g	
第10図25	SH04	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	10.9	幅	10.6	厚さ	3.5	240g	
第10図26	SH04	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	16.6	幅	15.3	厚さ	10.7	3.5kg	
第11図27	SH04	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	24.3	幅	28.1	厚さ	8.0	9.5kg	
第11図28	SH04	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	35.4	幅	27.5	厚さ	10.0	17kg	
第12図29	SH04	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	37.2	幅	19.7	厚さ	8.0	9.5kg	
第12図30	SH04	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	32.9	幅	25.7	厚さ		18kg	赤色顔料付着
第14図17	SH05	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	7.5	幅	7.2	厚さ	7.5	510g	
第14図18	SH05	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.6	幅	16.2	厚さ	6.3	2kg	
第17図5	SH06	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	12.1	幅	5.9	厚さ	2.0	346g	
第17図6	SH06	砥石	安山岩	古墳時代前期	長さ	10.1	幅	7.2	厚さ	2.9	580g	
第17図7	SH06	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	12.9	幅	7.3	厚さ	3.4	814g	
第17図8	SH06	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	14.3	幅	7.8	厚さ	4.0	750g	
第17図9	SH06	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	10.5	幅	6.0	厚さ	2.0	375g	
第17図10	SH06	砥石	安山岩	古墳時代前期	長さ	6.5	幅	6.9	厚さ	1.8	176g	
第17図11	SH06	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	17.1	幅	14.1	厚さ	3.0	1.1kg	
第17図12	SH06	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	20.8	幅	29.6	厚さ	11.0	11kg	
第18図13	SH06	打製石器	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.5	幅	16.5	厚さ	3.0	786g	
第18図14	SH06	打製石器	安山岩	古墳時代前期	長さ	17.3	幅	12.3	厚さ	2.9	790g	
第20図5	SH07	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	13.8	幅	8.8	厚さ	5.8	1.2kg	
第20図6	SH07	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	7.7	幅	7.45	厚さ	3.2	329g	
第20図7	SH07	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	16.1	幅	9.7	厚さ	7.2	1.5kg	
第20図8	SH07	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.7	幅	9.6	厚さ	2.5	631g	
第20図9	SH07	砥石	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.0	幅	5.1	厚さ	4.3	371g	
第20図10	SH07	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	8.2	幅	10.1	厚さ	1.5	248g	混入?
第22図4	SH08	砥石	粘板岩	弥生時代中期?	長さ	10.1	幅	7.4	厚さ	1.1	117g	
第22図5	SH08	敲石	安山岩	弥生時代中期?	長さ	10.9	幅	7.9	厚さ	6.7	910g	
第24図14	SH09	紡錘車	粘板岩	古墳時代前期	長さ	5.8	幅	2.8	厚さ	0.8	13g	
第24図15	SH09	石庖丁	結晶片岩	古墳時代前期	長さ	5.2	幅	4.2	厚さ	0.8	23g	
第24図16	SH09	石庖丁	結晶片岩	古墳時代前期	長さ	4.3	幅	2.8	厚さ	0.8	24g	
第24図17	SH09	砥石	粘板岩	古墳時代前期	長さ	7.8	幅	5.3	厚さ	2.4	118g	
第24図18	SH09	砥石	粘板岩	古墳時代前期	長さ	10.2	幅	4.3	厚さ	1.1	58g	
第24図19	SH09	砥石	粘板岩	古墳時代前期	長さ	4.1	幅	2.9	厚さ	3.0	18g	
第24図20	SH09	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	4.6	幅	4.1	厚さ	1.0	26g	混入?
第24図21	SH09	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	7.8	幅	6.5	厚さ	1.0	94g	混入?
第24図22	SH09	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	12.5	幅	8.5	厚さ	6.9	1kg	
第25図23	SH09	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	15.5	幅	14.5	厚さ	13.5	4kg	
第25図24	SH09	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	8.9	幅	8.4	厚さ	2.7	329g	
第25図25	SH09	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	9.3	幅	5.2	厚さ	4.0	295g	
第25図26	SH09	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	5.4	幅	8.0	厚さ	1.9	151g	
第25図27	SH09	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	6.2	幅	8.4	厚さ	1.9	181g	
第25図28	SH09	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.8	幅	9.3	厚さ	7.9	1.5kg	
第25図29	SH09	不明	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.5	幅	10.3	厚さ	2.7	415g	
第25図30	SH09	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	14.4	幅	8.7	厚さ	5.9	1kg	
第25図31	SH09	石斧	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.2	幅	7.9	厚さ	0.8	117g	
第25図32	SH09	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	15.6	幅	13.6	厚さ	3.6	1.3kg	
第25図33	SH09	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	12.2	幅	9.9	厚さ	6.4	893g	
第26図34	SH09	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	10.4	幅	9.7	厚さ	5.8	829g	
第26図35	SH09	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	9.5	幅	5.2	厚さ	3.7	314g	
第26図36	SH09	不明	安山岩	古墳時代前期	長さ	7.8	幅	7.3	厚さ	3.3	265g	
第26図37	SH09	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.5	幅	4.3	厚さ	3.4	213g	
第26図38	SH09	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	17.1	幅	10.4	厚さ	6.5	1.8kg	赤色顔料付着
第27図	SH10	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	17.0	幅	11.1	厚さ	7.2	1.5kg	

第5表 井尻日焼田遺跡出土遺物一覧表（石器②）

挿図番号	遺構名	種類	材質	時期	法量 (cm)							備考
					長さ	幅	高さ	厚さ	重量			
第31図13	SH13	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	9.5	幅	7.0	厚さ	3.0	351g	
第31図14	SH13	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	12.6	幅	6.1	厚さ	4.8	530g	
第31図15	SH13	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.8	幅	7.5	厚さ	4.8	687g	
第31図16	SH13	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	10.9	幅	8.3	厚さ	7.7	947g	
第31図17	SH13	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	12.2	幅	5.9	厚さ	5.6	533g	
第31図18	SH13	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	13.2	幅	14.5	厚さ	8.0	2kg	
第32図19	SH13	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	21.4	幅	26.1	厚さ	8.2	6.9kg	赤色顔料付着
第32図20	SH13	台石	安山岩	古墳時代前期	長さ	37.0	幅	32.0	厚さ	10.8	22.5kg	
第34図5	SH14	石庖丁	結晶片岩	弥生時代?	長さ	4.1	幅	5.1	厚さ	0.9	18.9g	混入?
第34図6	SH14	石庖丁	結晶片岩	弥生時代?	長さ	4.3	幅	3.2	厚さ	0.8	17.6g	混入?
第34図7	SH14	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	8.9	幅	9.0	厚さ	3.3	464g	
第34図8	SH14	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	13.8	幅	10.5	厚さ	6.0	1kg	
第36図1	SH15	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	14.2	幅	9.0	厚さ	2.1	521g	
第48図8	SP224	砥石	粘板岩	古墳時代前期	長さ	5.7	幅	3.1	厚さ	1.6	51g	
第48図9	SP364	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	9.9	幅	6.3	厚さ	1.4	112g	混入?
第49図9	I区	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	5.7	幅	6.5	厚さ	1.5	91g	
第49図10	I区	砥石	安山岩	古墳時代前期	長さ	4.5	幅	6.2	厚さ	1.4	37g	
第49図13	I区	石庖丁	結晶片岩	弥生時代?	長さ	5.2	幅	7.0	厚さ	0.5	32g	
第49図14	I区	石鍋	滑石	中世	長さ	6.5	幅	5.5	厚さ	1.2	75g	石鍋の再加工品
第50図39	II区	砥石	粘板岩	古墳時代前期	長さ	3.4	幅	3.4	厚さ	0.8	18g	
第50図40	II区	砥石	粘板岩	古墳時代前期	長さ	5.3	幅	5.2	厚さ	1.1	84g	
第50図42	II区	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	7.5	幅	11.1	厚さ	1.0	144g	
第50図43	II区	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	9.5	幅	13.7	厚さ	1.1	258g	
第50図44	II区	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	6.0	幅	4.6	厚さ	0.9	30g	
第50図45	II区	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	6.2	幅	6.1	厚さ	1.2	69g	
第50図46	II区	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	8.3	幅	4.6	厚さ	1.6	97g	
第50図47	II区	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	6.6	幅	5.2	厚さ	1.6	60g	
第50図48	II区	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	6.0	幅	6.1	厚さ	1.1	61g	
第50図49	II区	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	6.7	幅	8.0	厚さ	1.4	106g	
第50図50	II区	敲石	安山岩	古墳時代前期	長さ	11.5	幅	10.5	厚さ	8.4	1.1kg	
第50図51	II区	砥石	安山岩	古墳時代前期	長さ	6.6	幅	6.8	厚さ	1.3	59g	
第50図52	II区	磨石	安山岩	古墳時代前期	長さ	14.5	幅	7.5	厚さ	5.0	900g	
第51図53	不明	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	6.2	幅	7.1	厚さ	1.6	114g	
第51図54	不明	打製石器	安山岩	縄文時代?	長さ	18.0	幅	7.3	厚さ	1.6	293g	

第6表 井尻日焼田遺跡出土遺物一覧表（金属器）

挿図番号	遺構名	種類	材質	時期	法量 (cm)							備考
					長さ	幅	高さ	厚さ	重量			
第38図	SH16	鏡片	銅	古墳時代前期	長さ	4.0	幅	2.6	厚さ	0.3	7.8g	破鏡
第44図1	1号墓	耳環	銅	古墳時代?	長さ	2.4	幅	2.3	厚さ	0.6	7.8g	混入
第50図4.1	遺構外	不明	銅	不明	長さ	15.6	幅	0.5	厚さ	0.6	31.3g	